

ギリシア人の見た1935年の日本

——ニコス・カザンザキスの眼差し

村田奈々子

はじめに

20世紀のギリシア人知識人で日本を訪れ、旅行記を残したのは、作家・詩人のニコス・カザンザキス（1883～1957年）の他にない。カザンザキスは、1935年と1957年の二度、日本を訪れている。最初の旅では、3月末から4月末までの約一か月、日本に滞在した。その後、彼は中国を旅した。このときカザンザキスは、ギリシアの日刊紙『アクロポリス』の特派員として日本の地に足を踏み入れた。彼の日本での体験は、同年6月9日から8月17日まで『アクロポリス』紙上で不定期に連載された。1937／1938年には、この新聞連載をもとにした旅行記『日本と中国を旅して』（*Taxideύοντας Ιαπωνία-Kiva*）が出版された¹。日本と中国の旅の経験を生かした文学作品は、旅行記に留まらない。旅の翌年の1936年には、小説『石の庭』（*Le Jardin des rochers*）がフランス語で発表されている²。この小説は、カザンザキス自身と想定される西洋人を主人公とする、日本と中国を舞台とした物語である。小説中のエピソードには、『日本と中国を旅して』と重なる部分も多く、あきらかに旅の経験をもとに創作された作品といえることができる。

カザンザキスは自分の人生に最も影響を与えたものとして「夢と旅」を挙げている³。彼は生涯を通じて実に多くの国々を旅した。そのうちのいくつかの旅の経験は旅行記として出版されている。『日本と中国を旅して』は、そのような旅行記のひとつである⁴。

本稿では、カザンザキスの最初の日本旅行に焦点をあてる⁵。日本が軍国主義に染まっていく時代に、ギリシア人カザンザキスの目に映った日本の姿を確認する。史料としては、彼のパートナーだったエレニ・サミウ（以

下「エレニ」と記載)⁶に旅先から綴った手紙⁷を参考にしつつ、主に『日本と中国を旅して』⁸を使用する

1. カザンザキスの生涯と活動⁹

日本でニコス・カザンザキスの名を知る人は少ない。しかし、何度もノーベル文学賞候補にノミネートされている（1956年には最終選考でスペインの詩人ファン・ラモン・ヒメネスに一票差で敗れた）ことから、現代ギリシア文学を代表する人物と言ってよい。

カザンザキスの文学作品は、前述の『石の庭』の他にもいくつか邦訳されていて、日本語で読むことができる¹⁰。そのなかのひとつ『その男ゾルバ』は、日本では小説としてよりもミュージカルとして知られているであろう。ギリシア語の原題は『アレクシス・ゾルバスの人生と冒険』（*Βίος και πολιτεία του Αλέξη Ζορμπά*）である¹¹。この小説は1964年にアメリカで映画化されたのち、ブロードウェイでミュージカル作品として上演された。日本では、1980年代後半から2000年代に、俳優藤田まことが主人公ゾルバを演じて好評を博した¹²。

今日、カザンザキスは第一に小説家として知られている。しかし、カザンザキス本人は、戯曲、詩、宗教哲学がみずからの創作活動の中心であると考えていた¹³。実際、カザンザキスが自分自身の業績で最も評価していたのは、ホメロスの『オデュッセイア』の現代版として書き下ろした全33,333行からなる長篇詩『オデュッセイア』である。彼はこの作品の完成に13年（1923～1938年）を費やしている¹⁴。

カザンザキスの生涯を振り返ってみよう、カザンザキスは1883年にクレタ島で生まれた。当時すでにギリシア王国は建国されていたが、クレタ島はギリシア領には含まれておらず、オスマン帝国の支配下に置かれていた。カザンザキスはオスマン帝国臣民として誕生した。父ミハリスは、農作物とワインを取り扱う商人だった。当時クレタ島には、イスラーム教徒とギリシア語話者の正教徒が共存していた。1830年のギリシア王国成立後、島の正教徒はギリシアへの統合を求めてたびたび蜂起を企てた。1889年の騒

擾時、6歳のカザンザキスと彼の家族は半年ほどギリシア本土のピレウスに逃れた。これが彼にとってはじめてのギリシア体験となる。その後、家族ともどもクレタ島に戻る。クレタ島での蜂起は断続的に続いた。1897～98年、息子の身の安全を考えた両親の考えによって、カザンザキスはギリシア領キクラデス諸島のナクソス島に送られ、そこでカトリックのフランス人修道士が運営する学校で教育を受けた。

クレタ島で中等教育を修了したカザンザキスは、1902年アテネ大学法学部に入學する。在学中から執筆活動をはじめ、小説『蛇とユリ』などを発表している。1907年にはパリに留學し、ジャーナリズムと文学の双方で文章を綴るようになる。のちに新聞記者の特派員として旅の記事を寄稿したり、スペインの独裁者プリモ・デ・リベラやイタリアのベニート・ムッソリーニ、ソ連の作家マクシム・ゴーリキにインタビューしたりしたカザンザキスのジャーナリスト的な面は、この頃からすでに顕著であった。パリではアンリ・ベルクソンの講筵につなかり、大きな影響を受けたとされる。1909年、ニーチェについての論文で博士号を取得し、ギリシアに帰国した。

当時のギリシアの政治状況は、彼の関心を引かずにはおかなかった。1897年のギリシアとオスマン帝国の戦争は、わずか30日ほどでオスマン帝国の勝利に終わった。戦後処理の過程でヨーロッパ列強が介入した結果、クレタ島はオスマン帝国を宗主国とする自治領となった。この自治領の施政責任者にギリシア国王ゲオルギオス1世の次男ゲオルギオス皇子が就いたことで、クレタ島が近い将来ギリシアに統合されることは、国際社会で確実視されるようになった。二度のバルカン戦争を経た1913年、クレタ島は最終的にギリシア領となった。

クレタ島をめぐる政治の大変動の中で、ギリシア・ナショナリズムは隆盛を極め、カザンザキスもその洗礼をうけた。1912年にバルカン戦争が勃発すると進んで従軍し、クレタ島出身の首相エレフセリオス・ヴェニゼロスの私的な事務所で働いた。第一次世界大戦後の1919年、彼はヴェニゼロス政府から、福祉省の長官に任命された。ロシア革命後、ポリシェヴィキ

に迫害されていたコーカサスのギリシア系住民15万人のギリシアへの引き揚げが、彼に与えられた任務だった。カザンザキスは、この任務を遂行したのち、ヴェニゼロスとともにパリ講和会議に出席し交渉にあたった。ギリシア人引揚者が国内に定住するための作業にも従事した。

現実の政治に直接かわり、国と同胞ギリシア人のために骨を折る一方で、彼は知的領域でも積極的に活動した。カザンザキスは、当時ギリシア社会を二分していた言語論争——古典ギリシア語に由来する純正語（カサレヴサ）と民衆の口語である民衆語（デモティキ）のどちらをギリシア民族の言語とするのか——で民衆語を支持する姿勢を明確にした。クレタ島のイラクリオンに、「ソロモス協会」をたちあげ、学校教育における民衆語の使用を強く訴えた。首都アテネの雑誌にも、民衆語を支持する論考を投稿したりした。

ギリシアは、第一次世界大戦直後から、ムスタファ・ケマル率いるトルコ革命政府軍との戦争に突入した。この戦争でギリシアは大敗北を喫した。その結果、トルコの民族国家建設の障害となる100万人超の小アジア在住のギリシア系正教徒住民は、難民として強制的にギリシアに送還されることになった。これにより、紀元前より脈々と続いてきた小アジアのギリシア世界は終焉を迎えた。この「小アジアの破滅」によって、領土拡大を標榜したこれまでのギリシア・ナショナリズムは退潮した¹⁵。

「小アジアの破滅」は、カザンザキスにも大きな衝撃を与えた。この出来事をベルリンで知った彼は、ギリシアは大義を失ったと判断し、ギリシア・ナショナリズムと決別した¹⁶。それにかわって彼の関心を引いたのは、ヴァイマル共和国の共産主義運動であり、社会主義革命を成功させたロシアだった。さらにカザンザキスは、以前から興味を抱いていた仏教における諦念の概念と、共産主義における行動主義の調和を志向するようになった。共産主義への関心の高まりから、彼はソ連定住をも視野に入れて、ロシア語の学習をはじめた。クレタ島に定住した小アジア難民を構成員とする共産主義集団の指導者にもなった。彼は、共産黨員になることこそなかったが、共産主義に対して好意的な姿勢を保ち続けた¹⁷。カザンザキスは、

反共産主義の風潮が高まった戦間期のギリシアにおいて、「反ギリシア」的人物として危険視されるようになった。

カザンザキスはこの頃から頻繁に海外を旅するようになった。念願だったソ連への旅をはじめ、エジプト、ドイツ、チェコスロヴァキア、フランス、スペインなどを訪問している。この間、旅行記と現代版『オデュッセイア』の執筆に取り組むかわら、ダンテの『神曲』やスペイン語の詩を現代ギリシア語に翻訳する作業を続けた。1935年には、本稿でとりあげる日本と中国の旅に出発した。極東の旅ののち、ギリシアのエギナ島に得た土地で『オデュッセイア』を完成させ、第二次世界大戦はこの島に留まった。この間、『その男ゾルバ』と『仏陀』を完成させた。

カザンザキスの国際的名声が高まったのは1940年代に入ってからのことである。第二次世界大戦後は、フランス政府に招待されたり、イギリスのケンブリッジ大学に滞在したりして執筆生活を送った。彼の海外生活は長期にわたり、結果的に、1946年にギリシアを離れてから1957年にドイツで亡くなるまで、一度も母国に戻ることはなかった。

一方、ギリシア国内でのカザンザキスの評価は分かれていた。1945年には、アテネ・アカデミーへの入会が二票差で否決された。しかし翌1946年には、ギリシア作家協会が、彼をノーベル文学賞候補者に推薦した。ギリシアの正教会は、カザンザキスの文学作品の中のキリストが、冒瀆的に描かれていると強く非難した¹⁸。

彼の体調は徐々に衰え、白血病を患うようになる。1957年の2回目の日本への旅の直後、ドイツのフライブルクの病院で74歳の生涯を閉じた後、カザンザキスの遺体はフライブルクからアテネに運ばれた。かねてからカザンザキスを快く思っていなかった正教会は、彼の遺体を公開して国民の目に触れさせることを拒絶した。遺体は故郷のクレタ島に移送された。しかしそこでも、正教会の墓地に埋葬することは許されなかった。このため、クレタ島がヴェネツィアに支配されていた時代（13世紀～17世紀）に建設された城壁に囲まれた、風光明媚な丘の上に今でも眠っている。後半生を旅と執筆に生きた彼にとって、最後の外国が日本だったことは記憶にとど

めておいてよいだろう。

2. カザンザキスの旅程

カザンザキスは、1922年にウィーンで仏教の研究に専念しはじめた¹⁹。彼の書簡集からは、1920年代後半に彼が仏教への興味を深める過程で、日本にも関心を持ったことがうかがえる。日本の古典（おそらくフランス語訳）を読み、日本を旅することを夢見るようになる。1928年の4月と6月の手紙には、翌年春には日本の旅が実現するだろうとの見通しを記している²⁰。しかし旅が実現したのは、それよりも6年後の1935年だった。彼は1928年から1929年にかけてソ連を広く旅し、ソ連に関する論考やソ連を舞台にした小説の草稿を書いたりしながら、ベルリン、チェコスロヴァキアに足を運んでいる。とても日本に行く時間的余裕はなかったように見える²¹。しかしながら、旅が延期された本当の理由は不明である。

カザンザキスの日本旅行の具体的な旅程は、新聞『アクロポリス』紙上の連載記事や、本稿で用いる旅行記からは明らかでない。しかし、彼が旅行中に書いた手紙によりほぼ確定することができる。カザンザキスがギリシアを船で出発したのは1935年2月9日頃である。船の行き先は、当時イギリスの植民地だった東地中海東端のキプロス島であった。キプロスから南下し、エジプト北岸のアレクサンドリアを經由して、2月20日にポートサイドに到着した。当時、ポートサイドは、日本人旅行者にとってはヨーロッパへの玄関口で、日本の船舶会社の旅客船が頻繁に往来していた港である²²。カザンザキスは、ここで日本行きの鹿島丸の乗船券を購入した²³。鹿島丸は2月21日にポートサイドを出航した。ここから約一ヶ月の船旅である。スエズ運河を通過して紅海に出た。インド洋に面したスリランカ南西の港湾都市コロンボ（3月5日到着）、スマトラ島（3月8日通過）、シンガポール（3月12日到着）、香港、上海を経て、3月25日に神戸に到着した。この間、カザンザキスは、コロンボ、シンガポール、香港、上海で下船して街を見物している。

日本に向かう船上、そして日本から、カザンザキスはエレニに何通も手

紙を送っている。手紙の冒頭で、彼はエレニに「アズマハヤ」とたびたび呼びかけている。この日本語を彼は船上で学んだようだ。「アズマハヤ」とは、日本神話にでてくる表現で「わが妻よ！」の意味だと彼女に説明し、帰国したらその神話を語ってあげようと手紙に記している²⁴。覚えてたの日本語を使って、遠く離れた愛するエレニに呼びかけるカザンザキスの茶目っ気が垣間見られる。また、自分とエレニの名前を漢字でどのように書くのかを、船上の日本人から教わって喜んでいる様子は、今日の外国人旅行者とさほど変わらない²⁵。

旅行記と手紙の記述によると、カザンザキスの日本での日々はかなり忙しかったようだ。3月25日に神戸に到着した後、1週間で大阪、奈良、京都に足を運んでいる。この間、いくつかの工場、大阪城、奈良公園、東大寺、法隆寺、春日大社、竜安寺などを訪れている。小堀遠州作の庭園をはじめとするいくつかの庭にも足を運び、博物館では谷文晁の作品を目にしている。4月2日には東京にいたことが確認される。歌舞伎座の「五世尾上菊五郎33回忌追善4月興行」で「茨木」を鑑賞し、200人の役者が勢ぞろいした口上も目にした。博物館では、狩野探幽の作品を鑑賞する機会もあった。乃木將軍宅も見学している。東京では、エレニのためにお土産の真珠を買おうと、非常に熱心に探している。さらに古い絵画／版画の画集も購入している²⁶。真珠や書籍の購入については、旅行記では一切触れられていないものの、手紙から確認できることである。東京滞在中には、鎌倉の鶴岡八幡宮や日光東照宮にも足を伸ばしている。鎌倉の体験については旅行記に記載があるが、日光については手紙に記載があるだけである²⁷。東京滞在のほぼ最後に、元在アテネ日本大使と食事を共にしている。これも手紙でのみ確認できる²⁸。4月22日の朝、カザンザキスは東京から神戸に戻った。神戸から次の目的地である中国に出航した日付は定かではない。しかし、4月26日に黄海から手紙を送っていることから、日本を発ったのはその数日前のことと推定される。

カザンザキスの日本訪問は、3月末から4月末の一ヶ月間で桜の季節である。穏やかな春の陽気を感じながらの旅が想像されるが、カザンザキス

の手紙によると、雨や曇りの日が多く、晴天の日は少なかったようだ。時々寒がっていることも窺われる²⁹。この年の4月の東京の平均気温は17.3度³⁰で、日本人にとってはとり立てて寒い4月ではない。旅行中、たびたび小さな地震が起こっていたことも手紙から確認される。特に東京滞在中は、毎日地震があったようである。ギリシアも地震が多い土地であるせいか、地震に対して特に怖がる様子はない³¹。

日本の食事は、カザンザキスの口にあまり合わなかったようだ。特に味噌汁と思われるスープには嫌悪感を示している³²。果物を買って空腹を満たしている様子も確認できる³³。

なお、彼が日本に向っている最中に、ギリシアではヴェニゼロス派によるクーデタがおこった。彼はそのニュースを、コロンボを出国した直後に知った。手紙からは、彼の驚きが伝わってくる³⁴。

ギリシアの政治は、第一次世界大戦が始まってから、君主制を支持する王党派と、共和制を支持するヴェニゼロス派に分裂して対立が続いていた。対立はとどまるところを知らず、一般の国民をも巻き込んで社会を分断した。1922年の「小アジアの破滅」の直後、ヴェニゼロス派からなる軍事法廷は、その責任を王党派政府に押し付けて、当時の首相ら6人を国家反逆罪の廉で死刑に処した。それ以降、両派の対立はますます激化し、戦間期ギリシアの不安定な政治状況をつくりだした。1935年のクーデタも、両者の対立が引き起こした出来事のひとつだった。ヴェニゼロスの指示のもと、ヴェニゼロス派の軍人が政権奪取を狙ったのである。試みは失敗し、ヴェニゼロスには死刑判決が下された。彼は国外に亡命し、刑の執行を免れた³⁵。これを契機に、1924年以來の共和制は破綻した。同年11月には、イギリスに亡命していた国王ゲオルギオス2世が帰還し、ギリシアは再び君主制に移行した。政治の一連の混乱は、翌年、メタクサス將軍によるナチ型の独裁政権の樹立につながった。

母国ギリシアのクーデタを、カザンザキスがどのように受け止めたのかはわからない。かつて、同郷クレタの出身であるヴェニゼロス首相のもとでカザンザキスは仕事をしたことがあった。しかし、「小アジアの破滅」

以降、彼はギリシアの政治に積極的に関与することはなかった。日本に向かう船上から出された手紙には、ギリシアからあまりに遠くにいて事態の詳細を知ることができず心配な様子もうかがわれる³⁶。とはいえ、日本を旅する間、この出来事に終始心を悩ますような様子は、手紙からも旅行記からも確認できない。彼の眼差しは、ギリシアではなく日本（そしてそのあとの目的地である中国）に集中していたようである。

3. 昭和10年（1935年）の日本

その日本にも、平和な時間が流れていたわけではなかった。1931年の満州事変以降、軍部の台頭は著しかった。国内では、従来の政党政治への不満が高まり、軍を中心とした国家を目指す運動が活発化した。軍人や右翼によるテロ活動が続発した。1932年5月15日には首相犬養毅が暗殺された。これ以後、国内政治においては、政党よりも軍部の発言権が強まっていった。1936年の二・二六事件後は、軍による政治への介入は決定的となった。

満州事変は、日本のそれまでの協調外交の終焉を意味した。1933年、国際連盟は、満州事変後に建国された満州国は日本の傀儡国家であるとし、日本による満州国の承認を撤回するよう求めた。日本はこれを不服として国際連盟から脱退した。続いて、ロンドン条約、ワシントン海軍軍縮条約も失効し、日本は、国際社会からの束縛から解放されると同時に、国際的に孤立し、軍国化の道を一途に歩んでいくこととなった。

一方、1930年代の日本経済は目覚ましい成長を遂げた³⁷。欧米の資本主義列強に先駆けて世界恐慌から脱し、1933年には恐慌以前の生産水準に達した。産業構造も、軽工業から重工業へと転換していった。

満州事変を契機とした日本の満州支配の確立と経済成長によって、日本国内のナショナリズムは高まった。それと並行して、日本人の民族的利益や「国体」を脅かすと見なされる思想や言論の統制が強まった。1925年には治安維持法が成立し、社会主義、共産主義思想・運動の取締が強化された。特高警察の巧みなスパイ戦術が功を奏し、1930年代半ばには共産黨員

が次々と転向した。やがて国家による弾圧は、自由主義的、民主主義的な学問にも及ぶようになっていった。

カザンザキスは、このような日本の国内情勢と、国際社会と日本の関係とを十分に理解していた。本稿で取り上げる旅行記、および『石の庭』を一読すると、当時の日本の中国への進出と軍部の野望、日本人のあいだのナショナリズムの高揚、それに対する中国の反応（反日感情）に、彼がいかによく通じていたかを確認することができる。カザンザキスの日本滞在中には、満州国皇帝溥儀が日本に來訪している。この出来事もおそらく把握していたであろう³⁸。旅行記でも、以下のように述べて、来るべき未来を的確に予測している。

現代の大きな苦難の中心地は、もはや地中海ではない。地中海はローカルな湖になってしまった。世界はより大きくなり、地中海での出来事は近隣の醜聞に過ぎなくなった。苦難の中心は、太平洋に移動した。（中略）ここでは4つの大国——中国、ソビエト・ロシア、アメリカ、そして日本——が互いに対立している。この太平洋でこそ、大きなゲームが、将来の戦争が展開されることになるだろう³⁹。

カザンザキスは、日本滞在中、警察の監視下に置かれていた。当時の日本の外務省史料は、カザンザキスを「容疑希臘人」と記している⁴⁰。このことから、彼が単なる観光を目的とする旅行者ではない外国人として、警察から目をつけられていたことがわかる。

エレニによると、この時、カザンザキスとは別のギリシア人特派員がすでに日本に送られていた。この人物が、カザンザキスの能力を妬み、彼は天皇の命を狙う危険なテロリストであるという情報を日本の当局に流したため、監視対象になったという⁴¹。この「告げ口」が実際になされたのか、その真偽は明らかではない。しかし、数度にわたるソ連への渡航歴や共産主義に共鳴するギリシアでの活動は、「危険な外国人」という疑いを抱か

せるのに十分だったろう。この情報を何らかのかたちで日本側が入手していたからこそ、警察の監視対象になったのだと考えられる。

カザンザキスは旅行中の監視状況について、のちにエレニに以下のように語った。

最初はとても苦痛だった。私が寝入るやいなや、彼らはやってきて私を起こし、早口のロシア語で話しかけ、数千のいんちきな質問をした。彼らは、私が矛盾したことを言うのを待っているのだった。しだいに、彼らは落ち着いた。私はゆっくりと眠ることができるようになり、警察の監視員は、私にとって監視の天使となった。彼は完璧な旅の道連れとなった。彼は自分の国に魅了されていたので、一般の旅行者が決して目にしないようなものを、私に見せてくれたのだ⁴²。

カザンザキスは、警察の監視に初めのあいだこそ困惑し、いら立ちもした。しかし、最終的には、彼の旅に役立ったと考えていた。警察も、彼を監視しつづけているうちに、危険人物ではないと判断するようになったのではないだろうか⁴³。『石の庭』にいくぶんでも事実が反映されているとするならば、彼を監視していた人物の名は「クゲさん」である。クゲさんと主人公の西洋人旅行者は、別れる前日には、一定の距離を残しながら、酒を飲みかわしつつ日本文化を論じあうほど親しくなっている⁴⁴。別れ際にクゲさんは主人公に向かって、「〔あなたは〕詩人です。言葉だけで満足している人間です。あなたは現在、仏陀について悲しげな詩かなにか書かれるでしょう。結構です。あなたはよい道を進んでいます。お続けなさい。なにもおそれることはありません」⁴⁵とあたかも友人を励ますかのような言葉を投げかけるのである。確かにカザンザキスは、第二次世界大戦中に『仏陀』という作品を書き上げた⁴⁶。エレニ宛ての手紙の中でカザンザキスは、警察官のことを「日本人の友達」と記している⁴⁷。カザンザキスは、一般の外国人旅行者がまず訪れないであろう場所にも足を踏み入れている。もし

かしたら、これも「天使」のお陰なのかもしれない。

4. カザンザキスの日本への眼差し

本章では、カザンザキスの旅行記を、4つの視点から照射し、彼の日本、あるいは日本人への眼差しを整理する。第一に昭和10年の日本の男たち、第二に昭和10年の日本の女たち、第三に日本人と信仰、第四に岐路に立つ日本である。これら4つの視点は仮にここで定めたものである。しかし、この4つの視点を軸にカザンザキスの旅を見渡すことで、日本の旅を通して、彼が何に強い衝撃を受け、どのような日本の姿を心に焼き付けたのかを、かなりの程度網羅できると思われる。

(1) 昭和10年の男たち

カザンザキスが最初に言葉を交わした日本人は、船上の物静かな老人だった。彼は船尾に胡坐をかいて座り、船の緑色の航跡を眺めていた。彼は強い日本語なまりの英語で、天皇が如何に人間離れした人物であるかを、カザンザキスに語った。老人が語った逸話によると、日露戦争時、日本の艦隊が沈もうが、ロシアの艦隊が沈もうが、天皇は「そうか、沈んだか」としか言わなかったという。老人の話は次のように続いた。

その日本の老人は小さな輝く目で私を見て、しばらく黙った。そして、ふたたび海を見つめて、私の知らない日本語をささやいた。「不動心！」

「フドウシン？」「それはどういう意味です」私は尋ねた。

「喜びに遭遇しようとも不運に遭遇しようとも、自分の心を動かさず、揺らぎなく保つこと。これは日本独特の言葉です。〔この言葉と意味が一致する言葉は〕他の言語にはないでしょう。メイド・イン・ジャパンなのです」⁴⁸

「不動心」という言葉は、カザンザキスに特別の印象を与えた。これをきつ

かけに、カザンザキスは老人と親しくなった。老人との会話は、日本までの退屈な長い船上での日々の中で、数少ない喜びとなった⁴⁹。

船上で言葉を交わしたもうひとりの日本人は、キリスト教徒のカワヤマさんである⁵⁰。カザンザキスは、来世に期待をかけるキリスト教という宗教が、現世を愛する日本人の精神によって、いかにその姿かたちを変えるのかを、カワヤマさんから聞いたがった。

カワヤマさんは、深い瞑想の中に沈んでいくように目を閉じた。そして目を開けて微笑み、こう言った。「日本人の精神は単純かつ複雑です。奇妙なことですが、その精神は独自の道を歩みます。それがわからないヨーロッパの方は、途方に暮れるでしょう。」

「私はヨーロッパ人ではありません。私はヨーロッパとアジアの間に生まれました。だからわかりますよ」と私は答えた。

「怒らせるつもりはありませんでした。」困った様子で、ふっくらした腕を上にあげながら彼は答えた。日本に行かれるのでしたら、日本人の精神について知っておいたほうがいい。特に次の3つの特徴については心に留めておくべきですね。」

- 1 日本人の精神は外来の考えを非常に容易に受け入れる。
- 2 日本人の精神は、外来の考えを盲目的に受け入れるのではなく、同化させる。精神には同化させる非常に大きな力がある。
- 3 同化の過程で、精神は外来の考えを従来の考えと調和させ、新旧の考えが結合し調和のとれた分かちがたい全体となっていく⁵¹。

カワヤマさんは、例として神道と仏教の関係を挙げる。仏教は神道と調和するまで日本には根付かなかったことを説明する。カザンザキスにはこのカワヤマさんの説明が心に残ったようである。というのは、日本人の同化

能力の高さについて、旅行記で繰り返し言及しているからである。

カザンザキスの質問に対する答えは、日本人の精神を説明したあとでなされた。カワヤマさんは、以下のように説明した。

キリスト教がわれわれに魅力的なのは、イデオロギーでも倫理観でも儀礼でもありません。それが犠牲の精神に基づいているからです。キリスト教の本質は犠牲です。犠牲の精神こそが、我々日本人を魅了し、我々をキリスト教徒にするのです。というのは、犠牲は我々民族が最も懂れるものだからです⁵²。

カワヤマさんはこう言って、切腹のジェスチャーをしてみせた。

老人にせよ、カワヤマさんにせよ、船上の日本人とカザンザキスとの会話は、いささか形而上学的な内容だった。しかし、いったん日本に入国したあとの日本人との会話は大きく異なる。これはカザンザキスの旅が単なる物見遊山ではなかったからであろう。彼は新聞の特派員として、ギリシアの読者に日本の現状を「伝える」役割を担っていた。この旅は彼にとって「取材」という側面を持っていた。したがって、日本国内で彼が出会い、会話し記録として残した日本人の姿は、当時の日本の世相を見事に体現している。

神戸で下船し、日本の土を踏んだカザンザキスがまず訪れたのは、殺虫剤工場である。ここの工場主が自分の工場を半日かけて案内した。

つま先立ちをしながら、背丈の小さい日本人工場主は午後いっぱい自分の工場を案内してくれた。工場では蚊を殺す粉末を製造していた。彼は、自分の工場が拡大して繁栄するにしたがって、日本も栄光に満ちて偉大になるかのように、熱狂的かつ誇りをもって私に説明した。彼の事業の進展と彼が得た富は、彼個人の野心や経済的な利益を超えたものだった。彼の事業は、日本民族と密接に結びついている聖なる共同作業だった。いくつか工場を

建てて、製品をつくるという儂い一時の存在であるこの工場主の後ろで、すべての日本国民がそれを注視し、働いているかのような感覚を覚えた。この感覚こそが、個人的な必要を超えて、より高いところをどこまでもめざそうとする神聖な欲求を、この工場主に与えているのであった⁵³。

カザンザキスの観察によると、この工場主は、個人は国家という全体の一部に包摂されることを当然視している。自分個人の営みは、日本という国家や国民の利益と直結していると固く信じている。まさにそれ故に、彼が事業で成功することは正当化されると考えている。「すべては国家の内にあり、何ものも国家の外にはなく、何ものも国家に敵対することはない」⁵⁴という、全体主義についてのムッソリーニの有名な演説の一節が想起される。

カザンザキスは、意気揚々とした工場主の説明に疲れてしまう。元来、形而上学的な嗜好を持つ彼にとって、工場主の経済上の利益は好奇心の対象にはなりえず、「有り余る重荷であり、聞いたとたん忘れようとしていた」⁵⁵ことだった。

工場主は、案内を終えてカザンザキスと夕食を共にした。カザンザキスは疲労困憊して、食事中、終始無言だった。重苦しい雰囲気の中で、工場主は口を開いた。その時の様子を、カザンザキスは次のように記している。

抜け目のない日本人は、私の心の中の不満を察知しているかのようにふるまった。そのような手際の良さは私にはできない芸当だった。沈黙のあと、果物を食べていると、彼はため息をついてこう言った。

「こんなことすべては、本質的には私の魂を満足させはしませんよ。私は一日が終わるのをとにかく待っているのです。事務所を出て家に戻る。家に帰ると真っ先に風呂に入る。着物を着て、裸足で庭に降りていく。雑草を抜いて、水をやる。花の育ち具合を

みる。窓際に座って、月が出るのを待つ。私の妻が三味線を弾いてくれます。低い声で私のために私が好きな俳句⁵⁶を歌ってくれます。——恋をしましょう。恋をしましょう。山の桜よ！ 私はあなた以外誰も知らないのよ。」

彼は少しの間、話すのをやめた。私は、彼の心の鋭さと彼の精神から発する魔法のような力に感嘆しつつ、多様な側面を持つ工場主を眺めた。彼のため息と今の話が、私を打ち負かす最善の方法だと、彼は意識的にわかっていたのだろうか⁵⁷。

工場主は、仕事を終えたあとの自分の生活について語った。それは完全に私的な空間での、彼個人の時間の過ごし方だった。カザンザキスも驚いているように、工場主はカザンザキスの心中を読み取って彼の興味を引こうとするかのように、この話をはじめたのである。先ほども国家という巨大なものとは一体化していた工場主は、家庭生活の細々としたことに心を配るひとりの人間として、カザンザキスの前に立ち現れた。工場主のまったく別の側面を垣間見たのである。この見事な変身に、カザンザキスは強く惹きつけられた。

大阪——カザンザキスは「黒いヴェネツィア」⁵⁸と記している——では、ナイトクラブに出かけた。そこで出会ったのは、髭を剃ったばかりの、怡幅のよい快活な中年の男だった。

彼はビジネスマンで、英語を少し話した。神戸の郊外に住んでいて、会社のある大阪に通勤しているとのことだった。彼は誇りに輝いた顔で、250万人を有するこの大きな都市のことを私に語った。

「大阪は、極東のマンチェスター、それよりもシカゴといったほうがいいかな。煙突を見てくださいよ。森のようでしょう。私たちは世界中に綿製品を輸出しているのです。大阪には6,700の工場があります。大阪は日本の経済の首都ですよ。」

彼は話しながら目を輝かせた。彼のがっちりしたつやのある身体には、途方もない活力が宿っていることが見てとれた。私の生涯において、活力に溢れた太った人々にしばしば遭遇した。こういう人たちの精神は、十分厚い肉体の中に触手を広げることで養われているのだろう。

この日本人は大きな葉巻に火をつけて続けた。

「私たちは働きますよ。一日中ね。電話、電報、統計、請求書、両替。でもね、夜は自分自身が楽しむ番だ。日本でこれほど多くのナイトクラブや、隠れ家的な愉快的なレストラン、多くの美しい芸者がいるところは他にないよ。大阪には6,000人の芸者がいるんだ。」

私はこの太っちょの話を楽しんで聞いていた。どうやってお金を稼ぐのか、どうやって芸者を愛撫するのかをよく知っている、彼の短くてふっくらした手を賞賛しながら見つめていた⁵⁹。

陽気な中年男は、世界に誇るべき綿製品が大阪から輸出されている事実を挙げて、大阪の経済の繁栄を誇らしげに語る。この男は、仕事を精力的にこなすだけではない。仕事を終えると夜の街に繰り出して、食事をしたりお酒を飲んだり、女性を相手に楽しむのである。カザンザキスは彼の話を楽しそうに聞いている。興に乗ったのか、少々場にそぐわない質問を男に投げかけた。

彼をからかうつもりで「あなたは仏教徒ですか？」ときいた。

彼は笑って、ずるがしく私を見つめて言った。

「もちろん。ときどき、仕事の調子がいいとき、寺に行ってもお金の足下に花を供えますよ。それで損することはありませんから。」

(中略)「もし仏陀が今日生きていて、大阪に家があったとしたら、彼もきっと私のような人でしょうね！」⁶⁰

カザンザキスは、改めてこの男を見つめ、以前どこかで目にした木製の仏陀の像と彼を重ねあわせる。突き出た腹といい、顔全体に広がる微笑みといい、そっくりだと得心する。

そうだ、確かに、私をずるがしこく見つめる、この強欲なビジネスマンは、朝風呂にはいったあと、身体から湯気をたてて裸のまま、冷たい畳に胡坐をかいて座るだろう。妻は黙って彼に緑茶を運ぶのだろう。その時彼は、まさに優しい仏陀であり、役に立たない世界——お茶、女、ビジネス——、つまりしばらくすれば破裂して空中に消え去っていくであろうものを、石鹸の泡を見るかのように見ているのだ⁶¹。

前述の神戸の工場主と同様、この男もどうやら二面性があるようだとかザンザキスは感じとる。一見欲深く見える男も、そんなものは儂いものにもすぎないことを理解しつつ生きているのだと感じた。このビジネスマンのお陰で、対照的な要素を併せ持つ、東洋の不可思議な精神を、多少なりとも垣間見ることができたように彼には思えた。

カザンザキスは、大阪でも工場を訪れた。今度は工場の技術者が彼を案内した。この技術者は、一般の労働者の監督をする立場の人間だった。技術者は、ヨーロッパと日本を比較して、日本人が生活全般において質素を好む性向が、日本の経済成長に貢献していることを誇らしげに語って聞かせた。

私は工場の事務所に座って、工場に広がっている地獄を案内してくれた優秀な技術者とお茶を飲んだ。技術者はゆっくりと煙草に火をつけた。彼は穏やかだが、優越感にひたっていた。彼は、甘い声で話しはじめた。

「すべてのヨーロッパ人は事実を学び、結論を急ぐ。我々を正しく判断したいならば、日本の現実を心に留めておいていただきたい

い。(中略)日本人の食生活はつつましい。(中略)日本の生活はヨーロッパやアメリカと比較にならないほど安い。1円あれば米1キロ、イワシー缶、魚半キロ、卵3つ、バナナ5本買える。だから、イギリス人は我々の給与だと飢え死にするだろうが、日本人は暮らせる。豊かに暮らせる。」

「それから、我々の家がどんなに簡素か知っていますか？(中略)我々の好みは簡素なこと、我々の生活は安価だ。(中略)わずかな給与を支えねばすむ結果、我々は2つの重要な成果をあげました。つまり、労働者の簡素な必要性を満足させる一方で、工業生産物の値段を安く抑えることができています。」⁶²

社会主義・共産主義思想に共感していたカザンザキスは、この技術者が、工業生産を順調に続けると同時に、労働者も満足させているという言葉に疑念を抱いた。彼が目にしたのは青白い顔をした女工である。労働者に十分な配慮がなされている労働環境とは思われなかったのである。カザンザキスの懸念に対して、技術者は答えた。

「忘れてもらいたくないのは、日本の労働者は機械に夢中なのです。機械のあらゆる特質が労働者を魅了しているのです。機械は労働者の自尊心を刺激して、日本人が遅れないように、白人を超えるようにさせるのです。労働者は信念をもって働いています。その信念が、自尊心なのか、愛国心なのか、狂信主義なのか、好きなものを選んでくださってかまいません。いずれにしても、労働者は信念を持って、疲れも知らず、12時間から14時間働いているのです。」⁶³

労働者の長時間労働は、「信念」という一言で正当化されてしまった。これにはカザンザキスもたまたま「あなたは、もちろん利益を…」と口にしてしまう。技術者は笑い出し、それを否定しない。自分たちは「禁欲的な

修行僧でもなければ慈善家でもない」から利益を手にするのは当然であるし、なにより労働者は熱狂的に働いているのに、それを止める必要がどこにあるのか。技術者は、資本家、労働者それぞれの階級に応じた法則があり、自分たちはそれを犯しているわけではないので、全く問題はないという態度を示す。カザンザキスは、食い下がる。

「でもすべての階級に普遍的な人間としての法があるのでは…」
「もちろん、私たちはそれらの法を遵守していますよ。労働者に配慮しています。彼らが良く眠れるように、健康で強靱であるために身体を洗い、鍛錬するように監督しています」
「そうすれば、彼らは良く働いて、よりたくさん生産しますからね…」
首の太い技術者は、また笑った。
「その通り！ 我々は倫理と有用であることを結びつけているのです。これ以上完璧な組み合わせはありますか？」⁶⁴

カザンザキスは、この技術者とこれ以上話したところで何も得るものはないと感じたのだろう。工場を出た途端に、日本の友達、つまり彼を監視していた警官に、彼の憤りを吐露する。

「人間がいかに機械や数つてもものを信用しているのか——そのことで私は疲れてしまったよ。ああわかっている。世界のアメリカ化は工業文明が消え去る前に通り抜けなければならない、避けることのできない哀しい段階だということはね。君らは今、その車輪の下にいるのだ。」⁶⁵

警官は彼をなだめて落ち着かせた。彼ら二人は、重苦しい気分を振り払おうとでもするように、このあと大阪城に向かった。

技術者の発言に見られる日本と西洋を比較しつつ、西洋に追いつき、追

い越そうとする意識は、当時の日本人の強迫観念となっていた。東京で出会った見識ある日本人も、カザンザキスに同様のことを語る。彼は、19世紀半ばに日本が開国した後の西洋列強との競争について語った。

『『白い悪魔』はずっと手強かったのです。我々はやつらに国を開きました。その後起こったことはすべて、我々には抗えない、論理的に言って必然の結果です。我々は引き返せません。というのは、彼らは我々よりもずっと先を行っていて、我々は彼らに追いつかなくてはならなかったのですから。もし追いつけなかったら、我々は敗れ去っていたでしょう。』⁶⁶

この日本人によると、西洋との厳しい競争において、日本が西洋文明を受け入れるべきか否かは問題ではない。受け入れるのは必然である。現下の問題は、インドの仏教や中国の芸術を同化したように、日本は西洋文明を同化し、日本的な装いを与えることができるかどうかということに尽きるという。この議論は、カザンザキスにとって目新しいものではなかった。船上のカワヤマさんから、これまでいかに日本人が異文化を巧みに同化してきたのかを聞かされていたからである。とはいえ、この見識ある日本人は、今回はそれが可能なのかいささか自信なさげである。先のことをあれやこれやと危惧するのは無駄で、イギリスがやったように行動あるのみと、カザンザキスに語る。

「多くの日本人は西洋文明を同化して、日本的な装いを与えることを望み、そうならなかったらどうしようと恐れている。誰にも結末はわかりません。」彼は微笑み、薄い肩をガックリとすくめた。「こんなことはただの口先だけの議論です。」彼は最後には自虐的に言った。「重要なのは行動です！ イギリス人を見てください。考えるのが危険だと理解するやいなや、彼らは皮のサンドバッグをぶら下げ、パンチを食らわせました。(中略) そうやっ

て彼らは考えることをやめて世界を征服したのです。」⁶⁷

西洋を超えなければならないという強迫観念は、学校の歴史教育にも影を落としていた。「イノシシのような歯をした痩せた男性教師」は、羽をむしられた雄鶏のように首を伸ばし、しわがれた声で、カザンザキスにこう語った。

我々が教えている我が民族の歴史が、正確に記述されていないということは認めます。そもそも歴史は実証された出来事を伝えるわけでもないし、科学的な目的を持っているわけでもない。歴史は、勇敢さと、国と日本民族のために犠牲を厭わない模範を若い世代に伝えているのです。我々には博識ぶった歴史学者も批評家も必要ありません。我々には、犠牲となる準備が整った勇敢な精神が必要なのです。我々は〔歴史教育を通して〕そのような精神を作りあげなければなりません。さもなければ我々は敗れ去るしかないのです。日本人の精神は、2つの軸のまわりを回っているということを覚えておいてください。ひとつは、外部から大きな危機が迫っているという緊張感であり、もうひとつは国の内部から発する偉大な使命感です⁶⁸。

男性教師によると、日本が工業力や軍事力を高め、西洋に近づけば近づくほど、西洋諸国はますます敵対意識をむき出しにする。一方、西洋に抑圧されているアジアを解放するという使命を日本は果たさなければならない。内外それぞれの圧力に晒されている現状では、実証的な歴史も、まっとうな歴史研究者も不要である。日本の歴史教育の目的は、国家のために犠牲となる精神を持つ若い世代を上げることだと、興奮気味に教師は語るのである。個人は国家の一部であるという、神戸の殺虫剤工場の工場主と同様の思考が、ここに看取できる。

この全体主義的な思考に、カザンザキスが批判的な言葉を並べることは

ない。しかし彼の想像力は膨らんだ。

233,862人の日本の教員は、若い世代を自分たちの周りに集めて、この教員のように叫ぶのだろう。こう喚くのだろう。「もはや小人でいるな！ 西洋人が我々を軽蔑するままだにさせるな。肉体を鍛錬せよ！ 大きくなれ！ 肉を食え！ 強くなれ！ 知力、身体、心を磨け！ 機械を、飛行機を、蒸気船を、大砲を、工場を見よ！ 気をつけよ！ 白人よりも我々が優れていなくては、我々は敗れてしまう。大地を見よ！ 祖先を生き返らせよ！ 彼らの命令——沈黙、自制、決意——に従え！ アジアは我々のものである！ 世界は我々のものである。パンジャイ・ニッポン〔ママ〕！ 万歳日本！」⁶⁹

カザンザキスのこの想像は、事実からそれほど乖離してはいなかったであろう。軍国化の道を一途にたどる日本の姿を、彼は旅行記の中での的確に切り取っていた。

（2）昭和10年の日本の女たち

カザンザキスの旅行記では、日本人女性についての記述が印象的である。そこには昭和10年の日本人女性のパノラマが展開されている。旅館の使用人、女工、バーやカフェの女給、物乞いの女性、茶道のお点前をする女性、中宮寺の尼、吉原の遊女、玉ノ井の娼婦、お座敷遊びの芸者、そしてアメリカ帰りで旅行代理店に勤める「モガ」⁷⁰など様々な職業の女性と出会い、その時々のやりとりや印象を記述している。

カザンザキスが日本に出発した時知っていた日本語は「サクラ」と「ココロ」の二語であった。船上で日本語の学習を続けて、日本に上陸する前には挨拶程度の日本語を身につけたようである。とはいえ、一人で旅するのに十分な日本語力とは言えなかった。本人も「全く心もとない」⁷¹と白状している。英語で会話できたのは、銀座を案内したモガひとりである。

それにもかかわらず、拙い日本語でのやりとりを通じた、様々な女性との出会いが綴られている。

カザンザキスが日本人女性の外見に抱いた印象は、決して良いものではない。日本人女性は「背丈が低く、醜い」という表現が頻出する。「口が汚く」（歯並びが悪いということか）、「膝が曲がっている」点が、彼が醜いと判断する材料になっているようである。当時日本人女性の多くはまだ和装だったが、洋装の女性も見られるようになっていた。和装の時の歩き方と洋装の時の歩き方は異なる。和装時は、腰を入れて膝を少々曲げ「すり足」気味に歩くものである。カザンザキスが目にしたのは、和装時の歩き方が習慣となっていた日本人女性が洋服を身に着け、脚を露出して歩いていた姿ではなかったか。確かに、その姿であれば不格好に見えたことであろう。

カザンザキスの描写で、明らかに理解が及んでいないとわかるのは、「芸者」という言葉の使い方である。どうやら彼は、着物を身に着けて（男性）客を喜ばせる職業に従事している女性は、すべて「芸者」と考えていたようである。茶道のお点前をする女性、バーやカフェの女給、お座敷での「本物の」芸者、これらすべてが芸者である。当時、彼がどのような旅行案内書を手にして日本を旅していたのか不明であるが⁷²、おそらく案内書の記載内容にも問題があったと考えられる。加えて、日本人自身が、外国人に誤解を与える発言をしていることも伺われる。例えば、前述の大阪のナイトクラブの日本人男性は、カザンザキスに「大阪には6,000人も芸者がいる」と自慢している。正確にはこの6,000人は水商売に従事している女性を意味していて、決して本来の意味での芸者ではないと考えられる。

その芸者について、カザンザキスは以下のような感想を漏らす。

芸者は、日本の仮面のひとつ——おそらく、最も甘く、最も人目を欺く魅力のある仮面のひとつ——だろう。挑発的で生意気な目をした厚かましい白人女性を見飽きてしまっているの、初々

しい子供のような目をして、まじめな顔で微笑む芸者が通りを歩く姿を見ると、心が落ち着く⁷³。

一般の女性は「醜い」と一蹴するものの、芸者はその限りではない。西洋の女性と比較して、控えめで微笑みをたたえた芸者を「子供のような」と形容している点は、帝国主義的、オリエンタリズム的な姿勢を多分に匂わせている。一方で、彼の心を落ち着かせる芸者の表情や立ち居振る舞いが、決して彼女たちの真の姿ではないことも十分に承知している。自分が目にする芸者の姿は、あくまで仮面であり、仮の姿であるという冷静な眼差しを保っている。

その仮面をかぶった芸者とカザンザキスとの楽しいやり取りの一場面が、大阪のバーで展開する。

私はバーに入った。ハートのような模様が施された黄色い照明の下に、色鮮やかで楽しげな模様の着物を身にまとった3人の上品な芸者がびくともしない穏やかな笑顔をとたえて座っている。彼女たちはタバコをすいながら男〔の客〕を待っている。彼女たちは、微笑みと、手と口でもって、男の一日の辛い仕事〔の疲れ〕を軽減させてくれる。私が店に入るやいなや、彼女たちはあたかも私を待っていたと言わんばかりに一斉に立ち上がった。私達は座布団に座り、パントマイム〔での意思疎通〕がはじまった。私を知っているのは、ココロ、サクラ、アリガトウ、タイヨウ、ツキ、オイクラデスカ、イイエ、ハイ、そしてゴギソウサマ〔ママ〕という程度の日本語である。こんな貧弱な語彙でどうやって交流できるというのか？ と言っても、私が店を出るときには、これらの語彙だけでもまったく十分ということを知った。芸者はいいものだ——ゴギソウサマ！〔ママ〕——意匠を凝らした照明もまたいい⁷⁴。

言葉が通じなくてもコミュニケーションがとれたというのは、中身のないおしゃべりがなされたということだろう。ナイトクラブの男性との会話を比較的詳しく書き綴っていたカザンザキスも、バーの女性とのおしゃべりの内容には一切触れていない。女性たちとはジュエチャーを交えたたわいもない話をして、とにもかくにも楽しく過ごしたのだろう。

しかし、翌朝、前日の芸者との戯れは夢となり、彼は現実に引き戻された。

翌朝目覚めたとき、私の心に苦々しい感情があった。あたかも間違った道を進んだような、あたかも自分の喫緊の義務を怠ったかのような。正しい人間は、純粹に甘いものに屈することはできないし、そうすべきでもないという時代に我々は生きているのに。着物と照明の背後から、怒りと絶望の声が聞こえる。希望のない日々の職務で歪められた軍隊のずっと続く列が、腹をすかせて落ち着きなく、非難するように人々を見つめている⁷⁵。

今の日本は、個々人の楽しみを追求する状況には置かれていない。バーで女性との気楽な付き合いにうつつを抜かしている人間は軍から非難されるに違いない。

非難の対象となることは承知しつつ、外国人カザンザキスは、本物の「芸者」とも時間を共にする機会を逸してはいない。日本を離れる直前、日本に20年住み、流暢な日本語を話すギリシア人が「日本でのよい思い出になるように」と、カザンザキスを芸者のいるお座敷に連れて行った。「いらっしゃいませ」と迎えられ、清潔な和室に案内された。まずは風呂に入って、浴衣に着替えた。胡坐をかいて座っていると、3人の芸者が部屋に入ってきて、宴がはじまった。

喜び、純粹さ、甘美！ ぬる燗をいただく。人生とはこの部屋のように、なんと単純なのだろう。喉が乾いた者が飲む水や、感情

抜きの裸体のように、愛とはなんと無邪気で聖なる結びつきなのだろう。古代ギリシア人が愛というものを理解した雰囲気がある。女に喜びを与え、女から喜びを受け取ることは、なんら致命的な罪ではない。

芸者は私達の周りにおいて、私達を見つめ、笑う。彼らの目はきれいで純粋で、図々しさやあからさまな主張がない。あたかも私達は親しい者の家に遊びに行き、その人たちが私達を愛してくれていて、私達のために宴会を開いてくれているかのようだった⁷⁶。

リラックスした雰囲気の中で、カザンザキスは、芸者たちのことをもっと知りたくなる。ギリシア語と日本語に通じた友人がいるので、意思疎通についての心配はない。これまで生きてきて一番うれしかったこと、今一番望んでいるのは何かを聞いてもらった。彼女たちの返答がカザンザキスを後悔させることになるとも知らずに。

三味線を弾いていた年長の芸者は黙ったままだった。私たちはもう一度尋ねた。

「うれしかったことなど覚えていませんよ」と彼女は答えた。「私が覚えているのは悲しいことだけ。7歳のときに、父親が借金をかかえて、私を売ったんですよ。買われたらすぐに、男に好かれるために、踊り、三味線、歌を学びました。大変でした。とても大変でした。」

私は銅製の火鉢に寄りかかっていた毛で覆われた猫のような若い芸者にもきいた。

「一番の望みは何なの？」

彼女は赤面して、火鉢の火の上に顔を向けた。私たちは答えてくれるようお願いした。けれども、彼女は答えなかった。すると、年長の芸者が穏やかではあるが、苦々しく笑って言った。

「結婚することですよ！ 他に何があるというのでしょうか。ここからこの娘を連れ去ってくれる男を見つけることです。私達すべてが望んでいることですよ！」⁷⁷

つい先ほどまでのにぎやかな宴会の雰囲気は消え去った。重い空気が流れた。カザンザキスは、「彼女たちを嫌な気持ちにさせる、望みのない質問をしたことをひどく悔いた」のである。芸者が芸者であり続けるためには、客の前で仮面をかぶり続けなければならない。客もそのことを承知のうえで、一時の楽しみを味わう。ところが、カザンザキスの不用意な質問のせいで、期せずして、仮面の下の彼女たちの生身の姿がさらされてしまったのである。

年長の芸者が再び三味線を手にとり膝の上において歌いはじめた。「私は何年もここで芸者をしている。私の愛する人を待っている。今日明け方愛する人が来た夢をみた。目覚めて、私は泣いた。そして今も泣いている…」

他の2人の芸者は元気に立ち上がって踊りだした。なんら厚かましい身振り手振りのない、エロティックな静かな追いかけっこだった。おそらく男と女が一緒にいる場面を演じていた。彼女たちは、草原の小さな二頭のヤギのように、無邪気に快活に踊っていた⁷⁸。

年長の芸者の歌で、目の前にいる芸者の哀しみは、芸者一般の哀しみに転換され、場の空気も多少なごんだのであろうか。若い芸者は気をとりなおして踊りを披露した。カザンザキスと友人のギリシア人はここで一泊して、翌朝若い二人の芸者に見送ってもらい、店をあとにした。

日本人女性の哀しみは、カザンザキスが訪問した工場にも漂っていた。前述のように、カザンザキスが訪れた工場では、日本人男性が意気揚々と誇らしげに、日本（人）の優秀性を語っていた。ところが、そこで働く女

性は、カザンザキスの目には哀しい姿で映っていた。

私は一昨日神戸の賢い工場主が、自慢気に自分の工場を見せてくれたのを思い出した。倉庫に入った。そこでは大勢の女性——若いのもいれば年寄りもいた——が12時間から14時間働いている。私は振り返って彼に尋ねた。

「彼女たちの一日の賃金は？」

私の質問が聞こえないふりをして、彼は話題を変えようとしていた。

「一日彼女たちはどれくらい稼ぐのですか？」

彼は恥ずかしいことを言うかのように声をひそめて答えた。

「1円の半分です。」「いくらですって？」「1円の半分です。」

私は肩を落とした⁷⁹。

カザンザキスは、日本の女性労働者の労働環境や健康状態に関する報告書を事前に入手していた。その報告書は、カザンザキスによると以下のような内容である。

織物工場の80%の労働者は女性である。彼女たちは一日14～16時間働く。彼女たちの健康状態は急速に悪化する。体重は最初の週で激減する。夜の仕事は特に疲弊させる。一年この仕事を続けられる者はいない。死ぬ者もいれば病気になって去る者もいる。数千人は家に戻ることはない。彼女らは、工場から工場へと渡り歩き、赤線地域で生涯を終えるのである。彼女らの多くは結核になる……⁸⁰

カザンザキスが目撃した女工の現状からすれば、この報告書が信頼に足るものだと判断するのに十分だったろう。彼は、目の前で働いている女工が近い将来たどる運命を想像できたはずである。

カザンザキスは数々の工場を訪問するたびに、青白い若い女性が機械の前で黙々と作業する姿を目にした。案内してくれる工場主や技術者を質問攻めにし、得られる数字を手帳に書き留めた。とはいえ、この作業が如何に意味のないことかは理解していた。「数なんてものは夢のように変幻自在で、才能ある人ならいくらでも組み合わせを考えて、自分に気に入る結論を引き出す」⁸¹に違いないからである。とうとう最後には、自分が日本の少女だったらと仮定して、「ええ、数は言っているわ／私は幸せだ／でも日々私は青白くなっていくの／それで今日咳をしはじめたわ！」⁸²という恨みつらみの句を綴るほどの憤りを覚えた。

カザンザキスが女工たちの悲惨な状況をしばし忘れることができる瞬間があった。それは意外にも茶の湯の場だった。

茶の湯のこのすべての静寂と緩慢なリズムは、私の血液の中に穏やかなリズムを生み出した。(中略)我々の時代のお茶会すべては、ハッシッシ(麻薬)のようなものに思われた。周りにいる肉体労働者や西陣の青い顔をした女工といった、心の中に浮かび上がる恐ろしい光景に対して、私たちの目を曇らせることができるのだから⁸³。

カザンザキスが出会った哀しい女性たちは芸者や女工に留まらない。彼は神戸で女性の物乞いに遭遇した。

雨が激しく降っている。桜の咲いている木の下で少し立ち止まった。背中に双子を背負っている女の物乞い——3人は互いにしっかりと繋がっていた——が神社の門前に立って、片手を伸ばしている。もう片方の手には、破れた紙製の傘が握られていて、2人の赤子に雨があたらないようにしている。私は手を伸ばし、彼女の弱々しい掌に硬貨をのせた。

女はほほ笑む。

「アメリカ？」彼女は言った。

「ノー、ギリシア」〔筆者注：カザンザキスは英語でGreeceではなく、日本語で「ギリシア」と答えた〕

女は細い目を大きく見開いて、私を見つめる。ギリシア？ 女にとっては初めて耳にした場所で、世界にそんなところがあるのかという風だった。

小さな神社の入り口にぶら下がっている赤い提灯の光の下で、私は女を見つめる。皺だらけの顔、ボロボロの歯……日本語で「姉妹よ！」という言葉さえ知っていれば、私は彼女を言葉で助けることができるだろうに！ 彼女の神である仏陀は、こう言ったものだ。「金銭での施し物は人を7年間養うことができるが、よき言葉は77年間養うことができる。」

雨足が強まった。流れるような雨は、今は赤い提灯のうえに落ちていて。濡れた墓石が光を放っていた。女は私の頭上に傘を差しだした。私は女の傍に寄った。忠実な楠木公の墓前⁸⁴で、黙ったままで動きもしない私たち4人は、破れた紙の避難所の下で身を寄せ合って、濡れた土のにおいを嗅ぎながら、幸せな気持ちで雨が止むのを待った⁸⁵。

物乞いの境遇は確かに哀しい。しかし、カザンザキスは日本の男たちが誇りを持って語る工場では得られなかった幸福を感じたのである。雨降る桜の木の下、楠木正成の墓前でのこの物乞いとのかやり取りは、カザンザキスのキリスト教的な愛と物乞いの女性の純粋な優しさが交差する感動的な一場面である。

カザンザキスは吉原の遊郭にも足を踏み入れた。ここを訪れることに恐怖を感じ、彼は二の足を踏んでいた。誘惑に耐えられない人間の肉体と精神が引き起こす墮落に対して憤りを覚えていたからである。ここでもまた、日本人女性の哀しい一面を目にすることは容易に予想できた。

それでも、東京滞在中のある日、ついに吉原に行く決心をする。タクシー

を拾い、小声で「ヨシワラ！」と告げた。恥ずかしかったからである。東京の中心部を抜けると、建物は徐々に低くなっていく。小雨が降りだすなか、提灯が突如増えだした。吉原に到着した。とはいえ、大門を入れてすぐに茶屋に乗り込んでいくほどの勇気は持ち合わせてはいない。行き交う日本人を観察したところ、恥ずかしそうに速足で歩くわけでもなく、のんびり家に帰るといった体で歩いている。「日本人は、キリスト教の色欲の大罪という概念を知らないから、彼らにとってこういうお手軽な快樂は罪ではない」⁸⁶——彼はこう考えて自分を勇気づけた。「いらっしゃいませ。吉原一の美女がいますよ。お入りください。1円！ 1円！ 1円！」⁸⁷という呼び込みの声の中、日本人に交じって見物をはじめた。

若者と老人の一团がやってきて、女性の写真が陳列してあるのを注意深く見ている。私は彼らと一緒に近づいた。狭い陳列ケースには、10人ほどの若い女性の写真が貼られていた。彼女たちの顔はおしろいがしっかりと塗られていて、どれも似たような顔だった。精巧につくられた建築物のような髪型、小さくて無邪気な目、固く結ばれた深紅の唇——死人の仮面、耐えられない苦痛——薄暗い緑の明かりがともされた長い台。私は屈んで、綿布の上に並んでいる女性の身体を凝視したとき、ふいに深緑の水の下で溺れた女性が私を見つめているのを見ているような気持ちになった…

先に進んだ。次の展示は紫色に照らされていた。扉のカーテンが動いて、おしろいを塗った女性が自分の手をみせて微笑みかけた。すぐに最初の女性と全く同じような次の女性が現れた。3番目の女性も同じ。わざとこれほどの厚化粧をしているように思えた。個人的な特徴を消すために。仮面と化すために。仮面の後ろには、女性という性だけが残るように。東洋の男たちは、特定の女性との接触は望まないが、感情抜き、動物的で、同時に熱烈で原始的な喜びを満喫したいかのようだ⁸⁸。

厚化粧をほどこした遊女はみな同じような顔をしており、個性を失っている。男の性のはけ口であることを受け入れた遊女は、死人のようにも見える。カザンザキスは、結局茶屋に入ることはなかった。数時間かけて女性を観察しながら通りを歩いた。吉原は彼が想像していたよりも恐ろしいところではなかった。「ここ吉原で私を捉えた恐怖は、人間的にまだ耐えられるものだった。というのは、ここでは茶屋や、女性たち、様々な声といったすべてのものが、心配から解き放たれた楽しい雰囲気醸していた」⁸⁹からだった。

彼を真の恐怖に陥れたのは玉ノ井という歓楽街だった。玉ノ井は、今日の東京都墨田区東向島付近に位置する。吉原の遊女が「公娼」だったのに対し、玉ノ井は「私娼」が売春行為をおこなう場所として知られていた。

カザンザキスが、どういう経緯で玉ノ井のことを知ったのかは詳らかでない。描写からは、監視役の警察官が同伴していたようには思われない。カザンザキスはひとりで玉ノ井を歩く。玉ノ井の描写は吉原の描写よりも詳しい。

男二人も通れないような狭く暗い道。溶けそうにない石鹼カスの強い匂い。石炭酸、そして人間の身体から発する悪臭。小さな戸口に小さな窓がついている数千の壊れかけた掘立小屋。どの窓枠からも、筆舌に尽くしがたい悲劇を抱えた女性の頭が見えている。部屋はその頭に丁度いい程度だ。顔はコテで塗りつけた化粧をしている。あらゆる通行人に女は微笑みかける。乾いた白粉と厚く塗られた口紅の間に無理に押し込まれていた女の微笑みははっきりしてくる。女は動きもせず、交代もせず、夜のあいだずっと動かないで立っている……時々、甘い優しい言葉をささやくように唇がやっとのこととで動き、また閉じる。

男たちはひっきりなしに通り過ぎていく。男は自分の相手を選ぶために注意深くあらゆる女を見比べている。時々男たちは数字を口にする——50銭、30銭、20銭——そして、再び黙ってもっと

良い値段で自分好みの品を見つけようと次の戸口に向かう……
酔っ払った父親が、8歳くらいの小さな息子を手で引きながら
やってきた。子供はヨーロッパ風のズボンと、カトリックの聖職
者がかぶるような、柔らかい幅広のつばつきの帽子をかぶってい
た。父親は戸口から戸口へと移動しては立ち止まって、子供に女
を見せていた。女は笑って、子供に話しかけた。子供は怯えて、
泣き出し、もう嫌だと拒絶していた。父親は笑いだし、子供を引
張って別の戸口に向かった……

私は急いで歩いた。この恐怖に耐えられなかった。自分の道ず
れにと林檎を2個買って自分を勇気づけた。私は無理やり自分の
目を、四角い窓に現れる恐ろしい数々の頭に向けさせ、怖くない
と思ひ込もうとした。中国の拷問で用いる首枷——罪人の頭を押
し入れた穴のあいた非常に重い板——のようだった。この女た
ちは、自分の首の上ですべての扉、掘立小屋、玉ノ井のすべて、
東京のすべて、すべての人類を載せているかのように見えた。我々
男たちが、女たちに最も重い責任を負わせているかのような恥ず
かしさを感じた。これらの女は戦場で最も悲惨な位置で戦ってい
て、我々男たちはそのうしろに隠れているかのようにだった⁹⁰。

不快なおいが充満する狭い道を、男たちが途切れることなく進んでい
く。ここは、吉原で聞かれた生きのいい呼び込みの声もなければ、男たち
が仲間どうしで会話をしながら女の品定めをしているという風でもない。
売買の商品でしかない厚化粧の女の顔が戸口の窓に並ぶ。男の口からは、
吉原の半値以下の金額が提示される。酔っ払った父親に連れてこられた
子供が泣き出すのも当然であろう。子供の理解を超えた光景である。カザ
ンザキスも恐怖から逃れようと、なぜかりんごを購入してしまう。カザ
ンザキスは男として恥じる。この女たちこそ全世界のあらゆる責任を背負い
こんでいる。この女たちは、生きるための戦いの最前線で、武器も持たず
に自分の身体ひとつで立ち向かっている——と。

カザンザキスの玉ノ井見物は続いた。彼の心の内側で何が起こったのかはわからない。ひとりの女を選んだのである。

突然、私は嫌悪感から脱した。窓に近づいて立ち止まった。現れた仮面をじっと見つめた。あまりに厚い白粉を顔に塗っていたので、女が私に微笑んだとき、塗り壁が剥がれるように、白粉の塊が割れた。女には人間の目が2つあった。かつて、遠い北の街で、私は檻に入れられた猿を見た。猿は、手のひらに頬をのせて、表現できない悲しげな目で私を見つめていた。ときどき猿は咳をした。猿は、自分が檻に閉じ込められているのは、不正で不法なことだと文句を言っているように感じた。…どうして、どうして？猿は悲しい人間の目で問い続けた。

私は頭を振ってこの悲しい思い出を追い払い、自分の目の前で、私に微笑みかけている女の顔を見た。私もなんとかして微笑もうとした。それに女は勇気づけられた。何か言葉を発した。私には理解できなかった。でも、声の調子はなめらかで、お願いしているようだった。私たちのあいだを隔てる壁は崩れ去ったと感じた。戸口は開き、自分でもよくわからないままに、貧相な畳の上に、胡坐をかいて座った。船員の写真が貼ってあるむき出しの壁、畳の上に布団が広げられていた。かつて、これらの女性たちはこの布団を背中に背負って通りを歩いていた…。

寒かった。女は膝まずき、黙って、燃えている炭で満たされた小さな火鉢を私の前に置いた⁹¹。

カザンザキスが見つめた女は人間の目を持っていた。この人間の目から、彼の記憶がよみがえる。どこか北方の都市で見た檻に閉じ込められて悲しそうにしていた人間の目を持った猿の姿である。この猿と女がカザンザキスの心の中で重なる。女の言葉は理解できない。しかし、心が通ったようだ。女の招きに応じて、部屋にあがった。このあと2人の間に何が起こっ

たかは読み手の想像に任せられている。

カザンザキスが詳細に記録に残した大半の女性は、哀しさをたたえている。カザンザキスはそのような女たちに、同情を寄せつつも、時に恐ろしさも感じている。

カザンザキスが描く、哀しい日本人女性の典型から外れているのは、旅行代理店勤務で、銀座を案内してくれたヨシロ⁹²という名の女性である。彼女はアメリカで学んだ経験があった。ヨシロはカザンザキスと英語でじかに意思疎通できただけでなく、自分の意見を明確に言葉にできる「近代的な」女性——モガ——だった。ヨシロとカザンザキスは、夜の銀座を歩く。

陽気で艶めかしい雰囲気だった。歩道には柳が並んで輝いている。女性は着飾って、白粉を塗って、しっかり化粧をしていた。黄色い肌のシャレ男ら——モボ——は、アメリカ製の背広を着ていた。モガは、生意気な眼差しでタイトスカートを身につけていた。あちらこちらで、芸者の匂いが放たれていた。芸者たちは伝統的な芳しい着物を身につけて、まだ勇敢に戦っていた。

私は、背の高い、断固とした意志を持つ男性のような若い女性ヨシロと一緒に歩いている。彼女に、いつの日か着物を身にまとった最後の日本人女性が、ある夜ハラキリをする際に詠むだろう俳句について語った。この近代的な女性は笑って、皮肉っぽく私を見た。

「その女が可愛そうだとでもいうの？ ハラキリでもなんでもさせときなさいよ。そうしたら私ら女は逃げ出せるのだから。弓矢が銃に出会ったとき粉々に碎け散ったように、羽がペンに出会ったときに散り去ったように、彼女もハラキリすればいいのよ。そんな女たちは民俗博物館の展示室に、たくさんの苔と一緒に立たせておけばいいのよ。」⁹³

ヨシロは、日本人女性に押し付けられた伝統的なイメージに憤慨していた。女性に対するイメージだけではない。「すき焼き」や「お茶会」といった典型的な日本食や日本の伝統文化に固執する外国人旅行者にも我慢がならない。自分たちの本性を伝統の枠組みの中に押し込めないでもらいたいという怒りに燃えている。

私たち若い女性がどれほどのあいだ何に苦しんできたのか、あなたにはわからないわ。私たちはお腹はすいているけど、少ししか食べない。だってそうするのがよいとされたのだもの。話すときは口を半分だけあけるの。知らない人が目の前にいるときには、ゆっくり小さく笑うの。私たちの顔は、メロンみたいに間延びしていて、口は金属の筒みたい。私たちの膝は曲がっているの。だって幼少期に縛られて、足を変形させられてしまっているから。スポーツには参加しなかったわ。米は食べるけれども、肉はほとんど食べないの。だから私たちの身体はやせ衰えて、醜くなるのよ。自分が好きな男性とは結婚できず、両親が好きな男と結婚するの。夫を尊敬しなければならないし、夫をご主人さまと呼ばなければならないし、彼の靴を履かせたり脱がせたりするの。私たちは夫に愛人がいることも承知しているの。これが伝統的な習慣なのよ。私たちは「先祖の精神」に従わなければならなかったの。でも、ねえ、「子孫の精神」に従うほうがよくなって？⁹⁴

カザンザキスは、日本の女性がこれまで耐えてきた苦しみを遠慮なく吐露するヨシロに好感を持った。彼女が、伝統から脱却し、来るべき未来をこれまでとは違った新しい精神で生きることを望んでいたからである。これまで出会った日本人女性が、子供っぽいまなざしで静かに微笑んでいたのとは、ヨシロは大きな対照をなしていた。

革命の最初の炎が燃えているかのようにヨシロの目は輝いてい

た。もちろん、その目は神秘的な東洋の魅力を失っていた。しかし、日本の女性の目は、観光客のためにつくられたものだろうか。この若い女性は、伝統的な着物、曲がった膝、異国情緒あふれる魅力を必ずや捨て去るであろう、過激な、過渡的なタイプの女性だ。私の目の前にいるのは、未来の日本の女性である⁹⁵。

カザンザキスにとってヨシロの言葉は、日本について書かれたどんな浩瀚な社会学の文献よりも価値があった。それほど、ヨシロの言葉は信ずるに値すると感じたのである。だからこそ、政治の話題にうつり、日本がアジアを解放するという使命を果たすためには戦争しかないと彼女が口にしたときのカザンザキスの落胆は大きかった。これまで多くの日本の男たちから見聞したこと以上の重みと真実味を持って、彼の心に響いた⁹⁶。

旅の前後で日本人女性についてのカザンザキスの印象は大きく変わった。彼が目にした日本人女性は、哀しい存在だった。彼女らは哀しいながらも静かに微笑んでいた。しかしながら、彼女らは、その哀しみのなかにただ茫然と身を任せているだけの人形ではない。彼女らは、生きることに毅然として立ち向かう、意志ある人間であることを彼は知った。

実際の日本の女性は、ポスターに描かれたり、ロマンティックで表層的な神話の中に登場したりする女性——微笑みやお辞儀や着物の着脱の方法を熟知している、凝った髪のかい方をして、高い木製の下駄をはいている繊細な人形——となんと違うことだろう。日本を訪れば、白粉をはいたこの仮面の下には、意志の力と忍耐と勇氣、そして勇敢な愛情を持ったひとりの人間が生きて戦っていることを知るだろう。(中略) 日本人女性の表面上の甘美さは彼女の弱さに由来するのではない。それは、規律ある意志の力に由来している。その力を持って、女はどんな不幸にもひるむことなく立ち向かう。女はどんなに貧しくても、不幸であったとしても、決して不満を口にしない。よき戦士が戦場にお

ける自分の役割を受け入れるように、女はすすんで自分の運命を受け入れている⁹⁷。

(3) 日本人と信仰

カザンザキスは桜の咲く春に日本を訪れている。ちょうど奈良——「日本のメッカ」⁹⁸と彼は記す——に向かう車窓から咲き誇る桜を目にした。この日はちょうど釈迦の誕生を祝う花祭り（4月8日）に当たっていた。奈良の手前の駅で下車すると、祭りを祝って奈良に向おうとしている楽しそうな庶民や僧の行列を目撃した。

「今日は花祭りです」と、深々とお辞儀をしながら駅長は私に説明してくれた。

巡礼者たちは、花模様や文字を刺繍したり、印刷した白い手ぬぐいで頭を覆っていた。この手ぬぐいは「花見手ぬぐい」——花のタオル——として知られているものである。日本人は桜の花を觀賞する春に、この手ぬぐいを被るのである。異教の喜び、春の雰囲気、笑いと様々な声。カッコウが松の木から飛び出してきてさえずり、奈良のほうに向かって飛んで行った。カッコウも巡礼者である。カッコウは仏像の足下にちょこんと座った。

私も歩き出したそのとき、比丘——仏教の修行僧——の一団が徒歩で到着した。彼らはずばの広い麦わら帽子をかぶり、黄色の長衣を身に着けていた。彼らは肩を超える長さの棒の助けをかりて、裸足で歩いていた。棒の上には小さな鈴がついていた。黙って憂鬱そうに視線を地面に向けて奈良への道を進んでいた。この黄色い僧たちは満開の桜の下で何を見つけようとしているのだろうか。もしかしたら、桜の花がこんなにもすぐ花びらを落としてしまうのを目にして、自己満足に浸っているのだろうか⁹⁹。

カザンザキスは、花祭りの一行が一緒になって笑ったり、歌ったりして

いる様子を十分に堪能した。日本人は快活で、宗教の持つ暗いイメージを鮮やかな色と花と人間の身体から発する匂いで明るいものにしてあげていると感じた。現世の苦しみを説くキリスト教が一掃してしまった「古代ギリシアの花祭りが、別世界の端に位置する日本でまだ行われている」¹⁰⁰という印象を持った。

巡礼者たちは自分たちの荷車を花で飾り、牛には花輪をぶら下げている。強そうな若者と美しい少女が荷車にのぼり、芸者の春に挨拶している。踊り、歌い、酒を飲み、日々の心配事を忘れる。水が再びワインになるように、人生の本質とは、素朴で興奮するものなのだ。

ディオニソスはギリシアを去って、この遠い〔日本の〕海岸にたどり着いた。ディオニソスは、今では着物を着て、両手に桜を抱えている。老人から若者まで声を合わせて再び歌を歌いはじめた。そうして木々と共に民族も栄え、死すべき生命はこの地上に不死の意味を帯びさせるのである¹⁰¹。

カザンザキスの言う「古代ギリシアの花祭り」とは、アンテステリア祭（アントスάνθοςは「花」の意味）のことである。この祭りは、古代ギリシアのオリンポス十二神のうちの一神ディオニソスに捧げられたものである。古代ギリシアでは、この祭りは現在の暦の2月に祝われた。子供の祭り、あるいは春の到来を告げる祭り、さらには新酒を祝う祭りであり、ディオニソスに葡萄酒を捧げたあと、酒宴と飲み比べ競争が催された¹⁰²。それと同じような光景が日本で展開され、着物を着たディオニソスが日本で生き続けていることをカザンザキスは発見した。人生における喜びとは、歌ったり踊ったりする素朴な行為の中にこそあるのだと再確認する。

日本では仏教と神道が混淆していることをカザンザキスは事前の知識として知っていた。しかし、キリスト教徒である一般のギリシア人にとって、このような信仰の形態は想像しがたい。そのことも考慮していたのだろ

う。カザンザキスは自分自身の解釈も加えて、日本における仏教と神道の有り様について説明する。日本古来の宗教は神道である。仏教は、のちの時代にインド、中国から日本に伝来した宗教である。やがて神道と仏教の間に対立が生まれ、神道の神々は、外来の仏を追い出そうとした。

しかし、日本人の精神には常に女性的な性質があった。このため、外来の種を求め、受け入れた。ゆっくりとではあるが、日本の子宮（神道）に〔仏教が〕種をまいて着床し、同化の過程が始まった。日本人は、仏教から自分たちに不要なものを捨て去り、同化できるものだけを選び取った。日本人は自然への愛を選んだ。すべて——植物、動物、人間——はひとつである。すべては我々の心で深く結びついている。禁欲主義、不幸や死を前にした無力感、唇に常にたたえている枯れることのない微笑も選び取った。さらに丁寧な物腰、社会生活において相手を思いやる態度や繊細さも選び取った¹⁰³。

カザンザキスは、船上のカワヤマさんから聞いた同化の概念を使って、仏教と神道の共存を説明する。それを受け入れた日本人の信仰のかたちは、難解な教義の中にはなく、日本人の日々の立ち居振舞いにはじまり、生きる姿勢すべてに具体的に現れていることを暗示している。

カザンザキスは、日本人と神道の神々との関わりについて、より詳細な説明を加えている。神道の寺院である神社にたどり着くにはギリシア文字のΠ（パイ）のような形をした深紅の鳥居をくぐる。神道とは「神への道」を意味し、救われたい者は、この門をくぐらなければならない。

先祖崇拜の宗教である神道は、日本の古来からの宗教である。日本人は一族の祖先を崇拜し、さらには民族の祖先、最終的には民族が共有する父である天皇の祖先を崇拜する。死者は生き続け、生者を支配すると日本人は信じている。父や母が死ぬと、霊

魂——カミサマ——となり、子孫たちと頻繁に連絡をとる。彼らは生者と喜びや悲しみを共有し、生者を勇気づけたり、罰したり、復讐したりする。大気は死者の霊魂で満ちており、霊魂は波に乗ったり、風にのったり、炎にのって数々のことをしてのける。善人もそうでない者も、価値ある者もそうでない者も、みなすべて神になるのだ。(中略)

そのようなわけで、すべての日本人は——特に天皇は——神の子孫なのだ。このため、今日においても、日本民族は自分たちのことをこの地球上のどの民族よりも優れていると考え、自分たちの国家を神国と見なしているのだ。(中略) 神道の神は800万もいるという。(中略) 神は怒るだけでなく、子供を笑わせたりして喜ぶ。神は人間的なものと考えられていて、飼いならされ親しみのある存在である。私たちが飼いならされた大きな象に近づくように、日本人は神と接する¹⁰⁴。

日本では死者がすべて神となる。このため、日本には神々が満ちており、「神国」を自称するのも頷ける。日本人と神々は、非常に親しい人間的な関係で結ばれていて、古代ギリシアの神々と人間関係を彷彿とさせるというのである。

カザンザキスは、神道に発する日本人の死生観についても説明している。

服従、犠牲、祈り——これら3つが神道の基本的な教えである。天皇には服従しなければならない。なぜなら彼は偉大なる神——太陽——の子孫なのだから。(中略)[神道の義務感が引き起こす、日本人の恐るべき力の根源を知ってはじめて] なぜすべての日本人が死をもともせず、神秘的な精神的高揚をもって、国のために死ぬことを受け入れるのかを理解するだろう。祖国、ミカド、神、先祖と子孫は、日本人にとって切り離せない不死の力なのである。死後も自らの民族と共にあり、決して死ぬことなどないと

信じているのであれば、自分ひとりの死をおそれる理由がどこにあるだろうか¹⁰⁵。

天皇を頂点とするすべての日本民族と自分個人を一体化させ、不死を信じる日本人の思考——カザンザキスは、これを「幻想」と評する。しかし、日本人はこの「幻想」を固く信じて、日露戦争でロシアに勝利しただけでなく、欧米列強との現実の競争においても数々の成果を収めてきたことを認める。一方、凝集力を失い根無し草となった白人は、個人という地獄のなかで惨めに生き、死んでいくだけだと、日本人とは対照的に描く。

カザンザキスは、様々な神社仏閣を見学し、茶の湯を体験し、能や歌舞伎を見物し、博物館では日本美術を鑑賞した。数々の日本での体験を経て、日本人を理解し、愛しはじめていると言わしめたのは、神社だった。

神社をいろいろ歩いてみて、日本を理解し始めている。日本人のちょっとした動きが、世界を映し出している神道の〔手水舎の〕きらきら光る水の表面と完全に調和していることが今ならわかる。日本の絵画がああいう風なのは、日本人が花々と子供たちを愛しているからなのだということが今ならわかる。今までは私には計り知れないように思われた、日本人の唇の周りに広がる微笑みの意味を想像できそうな気がする。なぜ日本人の女性が波打つように歩くのか、なにが彼女たちの魅力をかたちづくり、彼女たちの汚い口や曲がった脚を忘れさせるのが今なら理解できる。彼らがつくる質素な物——木製の箱、刃物、小さな器、扇子、人形、木製のサンダル（下駄）のなかに、意味深い魔法の言葉と愛と理解が、美と簡素さがあるのがわかる。神社の〔手水舎〕の水の上にかがみ、日本という顔とともに自分の顔を映し見たとき、彼らの舞踊、演劇、茶の湯、庭園、家々が真の意味を帯びてきた。

かつて、もう何年も前のことだ。ある女性と私は井戸に寄りかかっていた。2人は互いに顔を寄せ合っていた。暗く、きらきら

光って揺れる水の上で、2人の顔が一瞬動いた。その瞬間、私はその女性を愛していると悟った。

どうやら私は本当に日本を愛しはじめていた¹⁰⁶。

作家・詩人らしい文学的な表現となっている。ギリシア語で「日本 (η Ιαπωνία)」が女性名詞であることも影響していると思われるが、彼は感覚的に日本のなかに女性らしさを看取している。したがって、女性を愛していると悟ったときのように、日本を愛しはじめたというのは、彼の正直な気持ちであったと想像される。言葉ではまだ明確にはっきりと表現することはできないが、神社——とりわけ手水舎の水——を通して、彼が日本を旅して得た見聞の数々が、調和したひとつの理解として結晶化する過程が、彼の思考の中ではじまったのだろう。

(4) 岐路に立つ日本

カザンザキスにとって、自分が目撃した1935年の日本の様々な情景を統一されたイメージとして描き出すことは難しかった¹⁰⁷。おそらくその原因は、2つの相反する像——日本古来の伝統・文化に結びついた日本人の心の有り様と、欧米列強に伍するため西洋化し変わりゆく日本の姿——を目の当たりにしたからであろう。実際、日本の旅行を通じてカザンザキスの心に残ったのは「喜び」と「苦々しさ」であった¹⁰⁸。彼に喜びをもたらした体験の多くは日本の伝統・文化に結びついていた。一方、西洋化する日本社会の姿は、彼を苦々しい気持ちにさせた。

しかしながら、自分が目にした日本の現状を、彼は否定も肯定もしない。彼が日本を訪問したときに咲き誇っていた桜の花の背後には、武器弾薬が隠されていることも十分承知していた。手にするのは桜の花か、武器か——日本はいずれかの道を選ばざるを得ない地点に立たされていた。カザンザキスの記述からは、第三の道——伝統と西洋化の統合——への淡い期待が読み取れる。

日本は神秘的かつ重要な国で、2つの対立するものを混合して、ひとつの優れた統合を生み出そうともがいている。日本は、幾重もの螺旋状のバネのような弾力のある自制のきいた東洋の精神を、ヨーロッパの工業文明の物質的な装備のなかに溶け込ませようとしている。(中略)日本はそのような統合を生み出せるのだろうか。あるいは、古来からの日本の精神は失われ、すべての桜の木は枯れて、この魅力ある国は機械の奴隷に成り果てるのだろうか。これは大問題である。アジアの未来——それは世界の未来ということでもある——には、時がくればおのずと答えがでるだろう。今日本は危険な分岐点に立っている。一つの道は、西洋の文明に際限なく従うことである。機械への信奉を強め、古くからの精神を否定することである。もうひとつの道は、自分たちの精神、伝統、習慣を大切に、西洋文明を、自分たちの神秘的な身体（を守るため）の実用的な武器に留めておくことである¹⁰⁹。

カザンザキスは、現代日本の二面性を、古代ギリシアやソ連の例も挙げながら、より広い視野から比較文明論的に語る。

古代ギリシア人は自分たちの最初の文明の要素をオリエントやエジプトから受け取った。しかしそれらを変形させ、神話や神学、そして恐怖が生み出す怪物に人間の高貴さを与えることで、怪物のような神々から人間的な姿を救い出すことに成功した。まさに同じようなやり方で、日本人はインドから宗教を受け取り、中国や朝鮮から自分たちの文明の最初の要素を受け取った。日本人もやはり、物質的あるいは怪物的な要素に人間的な要素を付与し、人間の身の丈にあった独自の文明——宗教、芸術、行動——を創造することに成功した。これが、日本の持つ顔のひとつ——「美の顔」——である。もうひとつの顔は、厳しく断固とした決意に満ちた顔である。この顔は、私たちにソビエト・ロシアの顔を思

い出させる。〔ロシアは日本と〕同じように機械を崇拜し、同じように自分たちをとりまく危険を察知し、同じように西洋に追いつき、追いつきと決意している。同じように工業化にむけて大きな跳躍を果たし、同じように工業化の先にある、まだ隠された思想上の目的に向かっている。〔日本もロシアも〕世界に対する救世主的な使命を信じている。そしてこの2つの民族は、この使命を果たす最初の段階——アジアの征服——に立っている¹¹⁰。

とはいえ、カザンザキスは、やがて日本の伝統が消えていくことを予見している。東京銀座の光景を見た彼は、頭の中で想像力を膨らませた。

古い日本の精神は、提灯であれ、着物であれ、三味線であれ、救えるものはなんでも救おうと無駄な闘いを続けている。アメリカという地震がそれらを引き裂いて、日本の空に不快なアメリカの習慣を打ち立てようとしている。古い日本の精神が、非常に高さのある精巧に仕上げられた髪型で、最も高価な着物を身につける日が遠からず来るだろう。その精神は白粉をはたき、しっかり化粧をほどこしている。ラジオが喚き、現代的な女性らがカクテルを飲みはじめある晩、その精神は銀座の歩道に正座して、ハラキリをするだろう¹¹¹。

カザンザキスにとって、古くからの日本の精神は、着物を着た女性の姿で表象される。その精神は、最期の日をただ受け身で待つのではない。彼女は自らの意志で、その日を決める。その日、彼女は最高の身繕いをして、西洋化の象徴ともいえる銀座の路上で、自ら死を選ぶのである。

日本には、外来の文明を同化することを得意としてきた歴史がある。しかし、今回ばかりはそれはかなわずに終わるだろう。日本の伝統と西洋文明の統合が完成される見通しは暗い。その時、日本人はどうするか。答えはおのずとひとつに決まる。「アジアの新たなドン・キホーテの歴史的使

命」¹¹²を果たさんとする軍靴の響きが、カザンザキスの耳にははっきりと聞こえていたにちがいない。

おわりに

最初の日本訪問から22年後の1957年、カザンザキスは日本を再訪した。敗戦から12年を経た日本の姿は、カザンザキスにどう映ったのか。

二度目の旅は中国を主な目的地としていた。中国共産党がカザンザキスを招待したのである。そのついでの日本訪問となった。したがって、一度目とは逆に、カザンザキスは中国から日本に入国した。7月末から8月初めのわずか10日から2週間、日本に滞在したあと、帰路についた。しかし機内で体調を崩し、回復することなく、そのまま10月26日にドイツで亡くなった。このため、二度目の日本の旅についてまとまった文章は残されていない。唯一残されているのは、日本滞在中にカザンザキスが残したメモと、旅に同行した妻エレニが加筆した文章である¹¹³。東京に到着した7月26日のメモには以下の記述がある。

午後5時東京到着。帝国ホテル。東京はアメリカ化されている。広く、どこまでもつづく通り。単調で凡庸な建物。最初の旅と違う点の一つ。女性が以前より美しくなっていて、脚が曲がっていない。背中に赤子を負ぶってもいない。彼女らの口（歯？）すら矯正されている¹¹⁴。

カザンザキスが真っ先に気づいた二十数年前との違いは、女性の外見と立ち居振る舞いだった。初回訪問時の日本人女性の「醜さ」がよほど印象に残っていたのだろう。一方で、彼が予見したとおり、東京の中心部、帝国ホテル付近は、広い道路と画一化した建物が連なるアメリカ的な面白みのない街となっていた。

二十数年で変わったのは、日本だけではない。彼自身も変わった。この時作家としてのカザンザキスの名声は国際的なものとなっていた。彼のメ

モ書きと妻の追記から、日本滞在中に出版社の編集者と会う機会があったことが確認される¹¹⁵。日本でも彼の作品の邦訳を出版する動きがはじまっていたということだろう。さらにこの年には、彼の小説『キリストはふたたび十字架に』を原作とした、ジュール・ダッシン監督のフランス・イタリア映画*Celui qui doit mourir* (邦題は『宿命』)が封切られた¹¹⁶。この作品は、カンヌ国際映画祭国際カトリック映画事務局賞を受賞した。日本でも同年10月からの上映が決まっていた。カザンザキスの訪日はその直前のことだったわけである。カザンザキスは、映画の上映権を買った日本人女性Kとその娘と会い、銀座のレストランで楽しく食事をしたという。このKは、川喜多かしこと考えて間違いないだろう。彼女は、『宿命』を日本に輸入した東和映画会社の代表を務めていた人物である。興行は成功した。ギリシア近現代史を扱った、日本人には全くなじみのない内容だったにもかかわらず、日本でも高く評価され、この年のキネマ旬報ベストテンの第2位を獲得した¹¹⁷。

知名度が上がったことも影響しているのだろう。最初の訪日時とは異なり、日本の複数の文化人がカザンザキスと面会している。虫明亞呂無との会見では、虫明が、「国家思想よりも個人の生活に根差し」た政治との結びつきを目指す愛国運動が日本で生まれつつあるという話をした。カザンザキスは以下のように応じた。

戦前に私がみた日本と今の日本の相違として、民衆相互間の意思伝達が戦前には一部のかぎられた場所ではしかおこなわれていない。勤勉な国民だとは思ったが生活力を感じなかつた。その意味では、やはり戦争が大きな変化というより進歩をもたらしたのだろう。困難の連続だろうが日本の将来を信ずる¹¹⁸。

「生活力を感じなかつた」とは、個人の生活よりも国家的使命を遂行することに血道をあげていた昭和10年の日本人（の男たち）を思い出していたのかもしれない。

カザンザキスと面会した文化人が残した文章の中に、重複して確認されるカザンザキスが口にした日本語がある。「不動心」である。最初の旅で船上の日本の老人が彼に教えた言葉である。日本語ではあることは間違いないが、決して日常的に使用する言葉ではない。したがって、日本の文化人も、カザンザキスの口から出たこの日本語を理解しかねて「不動土」と記したり¹¹⁹、何度もカザンザキスに問いかけて、ようやく「不動心」であることに気づいたりしている¹²⁰。彼の代表作のひとつ『その男ゾルバ』でも、尊敬する日本人の言葉として「不動心」が言及されている¹²¹。

「不動心」は、カザンザキスが生きるうえで永続的な影響を及ぼした言葉の一つと考えられる。「喜びに遭遇しようとも不運に遭遇しようとも、自分の心を動かさず、揺らぎなく保つこと」という老人の言葉と、クレタ島の彼の墓碑に刻まれた彼の信念を表す3つのフレーズは同じことを意味しているようにも思える。カザンザキスが最初の日本の旅から持ち帰った一番の土産は、日本の画集でもなければ、エレニへの真珠でもない。それは「不動心」だったのではないだろうか。

Δεν ελπίζω τίποτα,

δεν φοβούμαι τίποτα,

είμαι λήφτερος

私は何も望まない

私は何も恐れない

私は自由だ¹²²

¹ 出版年については諸説ある。1959年にパリで開催された『ニコス・カザンツァキ展』のパンフレットによると1937年だが、カザンザキス研究の専門家ピーター・ビエンによると1938年である。ニコス・カザンツァキ（清水茂訳）『石の庭』（読売新聞社、1978年）、212; Peter Bien, *Kazantzakis, Politics of the Spirit* (Princeton & Oxford: Princeton University Press, 1989), vol.1, xv.

² 清水茂による邦訳がカザンザキスの死後に出版されている。ニコス・カザンツァキ(清

水茂訳)『石の庭』(読売新聞社、1978年)

³ Νίκος Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας Ιαπωνία-Κίνα* (Αθήνα: Εκδόσεις Ελ. Καζαντζάκη, 1969) 6η έκδοση, 240; Nikos Kazantzakis, *A Journal of Two Voyages to the Far East: Japan China*, trans. George C. Pappageotes (Berkeley: Creative Arts Book Company, 1982), 254.

⁴ 1920年代後半から1930年代後半にかけて旅をした国々のなかから、『スペイン・イタリア・エジプト・シナイを旅して』、『ロシアを旅して』、『スペインを旅して』『イギリスを旅して』、そして『日本・中国を旅して』の計5冊の旅行記が出版されている。

⁵ カザンザキスの日本訪問と彼の思想と文学の関連性について論じたものに、以下の論文がある。福田耕佑「カザンザキス文学における日本描写——『心』、『桜』、『富士山』、『不動心』理解を中心に」『プロビレア』(2020年) 26: 1-24.

⁶ カザンザキスは生涯に2度結婚している。最初(1911-1926年)の妻はガラティア・アレクシウである。エレニとは1924年に出会った。最初の妻と離婚後、エレニとは長期にわたる同棲生活を続け、正式に結婚したのは1945年である。

⁷ 本稿では主に以下の3冊の評伝・書簡集に収録されているものを参照する。Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident: Biographie de Nikos Kazantzaki* (Paris: Plon, 1968); Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzakis: A Biography Based on His Letters*, trans. Amy Mims (Oxford: Bruno Cassirer, 1968); Peter Bien ed. & trans., *The Selected Letters of Nikos Kazantzakis* (Princeton & Oxford: Princeton University Press, 2020)

⁸ 本稿で使用するのは、Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*; Kazantzakis, *A Journal*.

⁹ 本節の記述は、特に注がない限り、Bien, *Kazantzakis*, vol.1, xix-xxvi; <Καζαντζάκης, Νίκος>, *Εκπαιδευτική Ελληνική Εγκυκλοπαίδεια* (Αθήνα: Εκδοτική Αθηνών), τομ. 4, 200-202 に依拠している。

¹⁰ 例えば、秋山健訳『その男ゾルバ』(恒文社、1967年)、井上登訳『兄弟殺し』(読売新聞社、1978年)、児玉操訳『キリスト最後のこころみ』(恒文社、1982年)、福田千津子・片山典子訳『キリストはふたたび十字架に』(恒文社、1998年)などがある。近年では、福田耕佑が、『禁欲』(京緑社、2018年)や『饗宴』(京緑社、2020年)など、カザンザキス作品の邦訳を精力的に手掛けている。

¹¹ この小説は、カザンザキス自身の第一次世界大戦時の経験がもとになっている。当時ギリシアでは、低品質石炭の需要が高まった。これに応じようと、カザンザキスはペロポネソス半島で褐炭採掘事業を始めた。この時協力したのが労働者のゲオルギオス・ゾルバスであり、小説の主人公のモデルとなった。

¹² アメリカの映画『その男ゾルバ』(英語のタイトルは *Zorba the Greek*) はアンソニー・クインをゾルバ役に配した。日本でのミュージカル公演は、シェイクスピア作品の邦訳で著名な小田島雄志が脚本の翻訳を担当した。日本公演については、小田島の以下のエッセイが参考になる。小田島雄志「その男 藤田まこと——『その男 ゾルバ』」『群像』第46巻第1号(1991年1月) 382-384.

¹³ “Kazantzakis, Nikos,” Graham Speake ed., *Encyclopedia of Greece and the Hellenic Tradition*, vol.1, 888.

¹⁴ “Kazantzakis, Nikos,” Graham Speake ed., *Encyclopedia of Greece*, 889; Mark Mazower, “Back from the Afterlife,” *The Times Literary Supplement*, no. 5738, 22 (Mar.2013), 8.

- ¹⁵ この戦争と「小アジアの破滅」に関する数多くの文学作品が発表されている。Thomas Doulis, *Disaster and Fiction: Modern Greek Fiction and the Asia Minor Disaster of 1922* (Berkeley; University of California Press, 1977; カザンザキスも、後年、この出来事に基づいた小説『キリストはふたたび十字架に』を発表している。
- ¹⁶ Mazower, “Back from the Afterlife,” 8.
- ¹⁷ Mazower, “Back from the Afterlife,” 9.
- ¹⁸ “Kazantzakis, Nikos,” Graham Speake ed., *Encyclopedia of Greece*, vol.1, 888-889; 『キリストはふたたび十字架に』と『ミハリス大尉』の二作品は、正教聖職者の否定的側面を描いているとしてギリシアの正教会からの非難にさらされた。さらに、『キリスト最後のこころみ』は、カトリック教会の禁書とされた。森安達也「カザンザキスの人と文学」、カザンザキス（秋山健訳）『東欧の文学 その男ゾルバ』（恒文社、1967年）22.
- ¹⁹ 森安達也「カザンザキスの人と文学」カザンザキス（秋山健訳）『東欧の文学 その男ゾルバ』（恒文社、1967年）15.
- ²⁰ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 189, 199.
- ²¹ Bien, *Kazantzakis*, vol.1, xxii.
- ²² 以下を参照。山中由里子「スエズの商人・南部憲一」橋本順光・鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌——寄港地を読み解く』（青弓社、2017年）、139-159.
- ²³ 原文では「コシマ丸」と記されているが、当時そのような名称の日本船は存在しない。日本郵船株式会社所有で、欧州航路を航行していた鹿島丸の間違いと思われる。逓信省管船局『昭和十一年日本船名録』（逓信省管船局、1936年）、20。「鹿島丸」については以下も参照。<https://jaa2100.org/entry/detail/042012.html>（最終閲覧2021年11月13日）
- ²⁴ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 316。「あづまはや」は『古事記』等にあられる表現で「わが妻よ」の意。
- ²⁵ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 318-319.
- ²⁶ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 327.
- ²⁷ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 327-328; Bien, *The Selected Letters*, 487-488.
- ²⁸ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 329; Bien, *The Selected Letters*, 488.
- ²⁹ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 328; Bien, *The Selected Letters*, 487.
- ³⁰ https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/monthly_s3.php?prec_no=44&block_no=47662&year=1935&month=4&day=&view=a2（最終閲覧2021年10月2日）を参照。
- ³¹ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 330; Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzaki*, 318; Bien, *The Selected Letters*, 488.
- ³² Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 86; Kazantzakis, *A Journal*, 91.
- ³³ Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzakis*, 314.
- ³⁴ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 319; Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzaki*, 309.
- ³⁵ 拙著『物語 近現代ギリシアの歴史』175-176; なお、このクエータについての日本側の同時代史料としては、内務省警保局が作成した『外事警察報』（昭和10年4月）第153号、79-90に、「ギリシャの革命」と題した記事が掲載されている。（<https://www.digital.archives.go.jp/img/1037672>）
- ³⁶ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 320; Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzakis*, 310.

³⁷ なお、1930年代のギリシアも産業の成長は著しく、マーク・マゾワーによると、1932年以降、ソ連と日本に次ぐ世界3位の成長をみせた。Mark Mazower, *Greece and the Inter-War Economic Crisis*, Clarendon Press; Oxford, 1991), 247.

³⁸ 吉川弘文館編集部・編『誰でも読める日本近代史年表』（吉川弘文館、2008年）2

³⁹ Kazantzakis, *A Journal*, 52.

⁴⁰ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04013103100、要視察人関係雑纂／外国人ノ部 第八卷 18. 希臘国人 (I-4-5-2-2_1_008) (外務省外交史料館)

⁴¹ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 326; Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzakis*, 315.

⁴² Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 327; Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzakis*, 315-316.

⁴³ 「希臘」で発行されている新聞についての外務省報告（昭和11年6月）のなかで、『アクロポリス』誌を筆頭にあげて、備考で以下のように述べている。「……良く記者を外國に派遣し其の都度會社獨特の方法に依り旅行記等を連載し好評を博している、記者カザンザキを日本に特派し好評を博したのも最近のことである、對日感情良く縷々日本の寫眞子、記事を掲載す。」この記述から、日本側はカザンザキスを危険人物とは判断しなかったことが推測される。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B02130849200、外国に於ける新聞 昭和11年版／（支那及滿洲国以外の諸外国の部）（情-39）（外務省外交史料館）

⁴⁴ カザンツァキ『石の庭』54-61.

⁴⁵ カザンツァキ『石の庭』60-61.

⁴⁶ Bien, *Kazantzakis*, vol.1, xvi.

⁴⁷ Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 326; Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzakis*, 315.

⁴⁸ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 20-21; Kazantzakis, *A Journal*, 23.

⁴⁹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 21; Kazantzakis, *A Journal*, 23.

⁵⁰ 原文のギリシア語の綴り（Καβαγιάμα）をそのまま発音すると「カヴァヤマ」になる。しかし、ギリシア語にはwの音がなく、wはβ（音価は [v]）で代用される。したがって、キリスト教徒日本人の名前は「カワヤマ」ということになる。ただし、バ [ba]（ギリシア語ではμπαと綴る）を、βαと綴ることもなかったわけではない。その場合は「カバヤマ」ということになる。

⁵¹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 32; Kazantzakis, *A Journal*, 35.

⁵² Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 33; Kazantzakis, *A Journal*, 36.

⁵³ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 57-58; Kazantzakis, *A Journal*, 62.

⁵⁴ 1925年10月28日におこなわれた、ミラノのスカラ座でのムッソリーニの演説。原文は以下の通り。“[T]utto nello Stato, niente al di fuori dello Stato, nulla contro lo Stato.” *Opera Omnia di Benito Mussolini XXI* (Firenze- Roma: La Fenice, 1983) 5^a ristampa, 425.

⁵⁵ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 58; Kazantzakis, *A Journal*, 63.

⁵⁶ カザンザキスは、「俳句」と「短歌」の区別ができていない。彼は、日本の短い詩形はすべて「俳句」と考えていた節がある。

⁵⁷ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 58-59; Kazantzakis, *A Journal*, 63.

⁵⁸ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 63; Kazantzakis, *A Journal*, 69.

⁵⁹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 61-62; Kazantzakis, *A Journal*, 67.

- ⁶⁰ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 62; Kazantzakis, *A Journal*, 67-68.
- ⁶¹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 63; Kazantzakis, *A Journal*, 68.
- ⁶² Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 67-68; Kazantzakis, *A Journal*, 72.
- ⁶³ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 69; Kazantzakis, *A Journal*, 74.
- ⁶⁴ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 69; Kazantzakis, *A Journal*, 74.
- ⁶⁵ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 69; Kazantzakis, *A Journal*, 74.
- ⁶⁶ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 128; Kazantzakis, *A Journal*, 135.
- ⁶⁷ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 128-129; Kazantzakis, *A Journal*, 135-136.
- ⁶⁸ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 152; Kazantzakis, *A Journal*, 161.
- ⁶⁹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 152-153; Kazantzakis, *A Journal*, 161-162.
- ⁷⁰ モガは、「モダン・ガール (modern girl)」の略。大正末期から昭和初期に流行した和製英語。
- ⁷¹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 42; Kazantzakis, *A Journal*, 45; Eleni N. Kazantzaki, *Le Dissident*, 324; Helen Kazantzakis, *Nikos Kazantzakis*, 313.
- ⁷² 日本郵船は、外国航路の旅客船用に日本を紹介する英語月刊雑誌 *The Travel Bulletin* を発行していた。カザンザキスは、少なくともこの雑誌には目を通しただろう。
- ⁷³ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 55; Kazantzakis, *A Journal*, 59.
- ⁷⁴ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 64-65; Kazantzakis, *A Journal*, 70.
- ⁷⁵ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 65; Kazantzakis, *A Journal*, 70.
- ⁷⁶ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 147; Kazantzakis, *A Journal*, 155-156.
- ⁷⁷ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 149; Kazantzakis, *A Journal*, 157.
- ⁷⁸ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 149; Kazantzakis, *A Journal*, 157-158.
- ⁷⁹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 65-66; Kazantzakis, *A Journal*, 70-71.
- ⁸⁰ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 66; Kazantzakis, *A Journal*, 71.
- ⁸¹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 66-67; Kazantzakis, *A Journal*, 71.
- ⁸² Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 67; Kazantzakis, *A Journal*, 72.
- ⁸³ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 112; Kazantzakis, *A Journal*, 118.
- ⁸⁴ カザンザキスは「神戸」という以外、場所について記していないが、楠木正成を祀る湊川神社と推測される。
- ⁸⁵ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 51-52; Kazantzakis, *A Journal*, 56-57.
- ⁸⁶ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 142; Kazantzakis, *A Journal*, 150.
- ⁸⁷ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 142; Kazantzakis, *A Journal*, 151.
- ⁸⁸ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 142-143; Kazantzakis, *A Journal*, 151.
- ⁸⁹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 143; Kazantzakis, *A Journal*, 151.
- ⁹⁰ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 143-144; Kazantzakis, *A Journal*, 151-152.
- ⁹¹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 144-145; Kazantzakis, *A Journal*, 153.
- ⁹² 女性の名前として「ヨシロ (Γιοσιρό)」は違和感がある。この名前は、カザンザキスの記憶違いで、「ヨシノ」(あるいは「ヨシコ」) だったのではないかと推測される。なお、『石の庭』にも、ヨシロという日本人女性が登場している。
- ⁹³ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 120-121; Kazantzakis, *A Journal*, 128.

- ⁹⁴ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 121; Kazantzakis, *A Journal*, 129.
- ⁹⁵ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 122; Kazantzakis, *A Journal*, 129.
- ⁹⁶ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 122-123; Kazantzakis, *A Journal*, 129-130.
- ⁹⁷ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 155-156; Kazantzakis, *A Journal*, 164.
- ⁹⁸ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 75; Kazantzakis, *A Journal*, 81.
- ⁹⁹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 76; Kazantzakis, *A Journal*, 81-82.
- ¹⁰⁰ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 77; Kazantzakis, *A Journal*, 82.
- ¹⁰¹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 77; Kazantzakis, *A Journal*, 82-83.
- ¹⁰² 高畠純夫・齋藤貴弘・竹内一博『図説 古代ギリシアの暮らし』（河出書房新社、2018年）、123.
- ¹⁰³ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 84-85; Kazantzakis, *A Journal*, 89-90.
- ¹⁰⁴ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 79-80; Kazantzakis, *A Journal*, 85.
- ¹⁰⁵ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 81-82; Kazantzakis, *A Journal*, 85-87.
- ¹⁰⁶ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 140; Kazantzakis, *A Journal*, 148.
- ¹⁰⁷ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 156; Kazantzakis, *A Journal*, 165.
- ¹⁰⁸ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 150; Kazantzakis, *A Journal*, 159.
- ¹⁰⁹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 49; Kazantzakis, *A Journal*, 53.
- ¹¹⁰ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 151; Kazantzakis, *A Journal*, 160.
- ¹¹¹ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 120; Kazantzakis, *A Journal*, 127.
- ¹¹² Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 119; Kazantzakis, *A Journal*, 126.
- ¹¹³ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 348-369; Kazantzakis, *A Journal*, 350-368.
- ¹¹⁴ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 348; Kazantzakis, *A Journal*, 350; 本文では言及しなかったが、旅行記では、女も男も子供もみんな赤子を負ぶって「タカタカ [ママ]」と下駄の音を立てて歩いている神戸の通りの様子を「人間カンガルー」と表現して物珍しそうに記述している。Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 55; Kazantzakis, *A Journal*, 60.
- ¹¹⁵ Καζαντζάκης, *Ταξιδεύοντας*, 356-357, 364; Kazantzakis, *A Journal*, 358, 364.
- ¹¹⁶ この作品は、1922年の小アジアでのギリシアとトルコ革命政府軍の戦争で生じたギリシア系難民をめぐるギリシア人どうしの対立を、キリストの受難劇とを重ねた内容である。
- ¹¹⁷ 『東和の半世紀』（東宝東和株式会社、昭和53年）25.
- ¹¹⁸ 虫明亞呂無『「宿命」の原作者カザンツァッキに会う』『映画藝術』（1957年11月）38
- ¹¹⁹ 植草甚一「ギリシアの大詩人カザンツァッキとの会見記』『映画の友』（1957年11月）93
- ¹²⁰ 河野興一「失禮な誤讀』『圖書』（1957年10月号）16-17.
- ¹²¹ カザンザキス（秋山健訳）『東欧の文学 その男ゾルバ』（恒文社、1967年）32.
- ¹²² 以下を参照。<https://www.news247.gr/afieromata/nikos-kazantzakis-den-elpiote-tipota-defovoymai-tipota-eimai-lefteros.7521951.html>; <https://www.reporter.com.cy/celebrity/listings/art-culture/article/103534/>（最終閲覧2021年11月26日）